鬼神降来

http://pink.sakura.ne.jp/~godon/

Dopamine

偏執狂的な作品に抵抗のない

成人向

蟲神楽

目次
Contents

２～２９……小説「蟲神楽」（文：ゴードン　絵：刑）
３０……解説
３１……あとがき
３２～３７……イラスト（刑）
３８……ゲストイラスト（零音様）
３９……ゲストイラスト（ＮＡＯＨＩＲＯ様）
４０……奥付

登場人物
Characters

六車 静衣（むぐるま せい）
数百年の伝統を誇る六車神社の宮司代行にして荘園領主。
古来より災いをもたらす「管魔」の現世への干渉を防ぐため、儀式を行う立場にある。

紗雪（さゆき）
荘園内に住み、六車神社に勤める巫女。
静衣を姉のように慕い、色々と世話を焼くのが好き。

十枝 小麻呂（とえだ こまろ）
都からやってきた陰陽師。
言霊を使って式神を自在に操る。

蟲神楽

一人の少女が闇と向かい合っていた。

闇は六畳ほどの部屋の中央、張り巡らされた注連縄の内側の空間に集い、球状の塊となって宙に浮いていた。

小屋の外から回り込んできた月明かりにうっすらと照らされてもなお、黒々とした闇は光を拒んで在り続ける。

薄明かりの中にその姿を浮かび上がらせる少女は、紫の模様が入った白い上衣、短めの紫袴、そして同じく紫の長い靴下に身を包んでいる。彼女の姿は一般的な巫女としては奇抜な服装だが、ここ六車神社の伝統的な巫女装束だった。

本殿から少し離れたこの祓所で彼女は、神の住処にあるまじきこの闇を前にして床に座し、一心に祈り続けていた。

「――ッ！」

目の前の闇が蠕動する気配に、巫女は短く息を飲み込んで身をこわばらせる。直後、巨大な闇の一部が分離したかと思うと、黒い塊となって彼女の身体めがけて飛来した。

「ギッ……！」

板が軋むような鳴き声。

手を伸ばせば届きそうなほどの間合いまで接近した闇の小塊は、三重に囲い巡らされた注連縄の上空で透明な障壁にぶつかり、床へと叩き落とされる。正体は、現世にある全ての生物とは異なる存在だった。

外見こそ黒いコウモリといった容貌だが、天然に生きるコウモリとは明らかに異なる負のエネルギーを帯びた生命体――すなわち『魔物』だ。

床に落ちた魔物は折れた羽根から薄紫色の体液を流し、しばらくピクピクと痙攣していたが、程なくその活動を停止し、即座に紫色の霧となって宙に散った。

「ふぅ……」

額の汗を白衣の袖でぬぐいながら、巫女は短く安堵の溜息をつく。

部屋の中央ではなお、巨大な球状の闇が衰えることなく黒々と渦巻き、この世のものならざる妖気を放っていた。

闇の正体は『門』と呼ばれる。

現世と黄泉とをつなぐ境界面である『門』は元来、盆などの死者の霊が行き来する時期にのみ現れるという。その多くは規模が小さく姿を現している時間も短いため、人々の目に触れることは滅多にない。

だが、今回は多少事情が違っていた。

現世と黄泉の間に存在し、本来その両方に干渉できないとされる『狭間』と呼ばれる空間がある。元々死者の霊が集いやすく、大きく成長することが多かったここ溜霊山の『門』は、その『狭間』とも接点を持ってしまっていたのだ。

隔絶された『狭間』に棲む者たちは、新たな住処を求めて『門』を越え次々と現世へやってこようとする。さっきのコウモリはその一例だ。六車神社は今、たびたび訪れる魔物の攻撃にさらされ続けていた。

宙に陣取る闇の澱からは、もはや激しい攻撃の意図は感じられない。だが、この『門』を隔てた先から溢れてくるむせ返りそうなほどの陰気は、先刻のコウモリもどきなど問題にならない程の、巨大で強力な魔物の存在を予感させていた。

「母さま……やっぱり私だけじゃ無理だよ……」

注連縄の紙垂を新しいものに交換しながら、巫女は天を仰いで歯ぎしりした。

平安初期、時の嵯峨天皇によって六車神社が建立されたそもそもの理由は、溜霊山に現れる『門』を儀式によって閉じようというものであった。『閉門の儀』と呼ばれるこの祭礼は、六車の姓を持つ処女の巫女か神職にのみ執り行う力が与えられ、魔物による被害の続出していたこの地域に、以後数百年にわたって安全をもたらしてきた。

しかし今、彼女には『閉門の儀』を行う力が無かった。

六車の姓を持ち、その血を引く身でありながら、三年前に起きた忌まわしい事件によって彼女はその神通力の全てを失っていたのだ。

『門』そのものに干渉する力を持たない彼女は、神具を用いて張り巡らせた結界を、毎晩の微力な祈りによって支え、現世へ侵入しようとする魔物を食い止めることしかできなかった。

祓所の扉を閉め、参道を横切って手水舎へ向かう。空は薄い雲に覆われはじめ、月明かりが徐々に心許なくなってきた。盆の時期に相応しい、蒸し暑く不快な夜が訪れようとしていた。

「一雨来るのかな……」

ずぶ濡れになると厄介だ。彼女は両腕と顔に溜まった汗と埃を軽く洗い流すと、足早に水場を立ち去る。社務所はすぐそこだ。

「あれ……？」

社務所に灯りがともっている。

三年前に両親を失ってから、彼女には肉親がなかった。縁談はあったが全て断り、今は神職としての祭事から荘園領主としての仕事まで全てを一人でこなしている身だ。たった一人心を許した村の娘を除いては。

「静衣さま！」

障子を開けたその向こうからお気に入りの香の匂いとともに現れたのは、彼女――六車静衣に最も安心をもたらしてくれる者の笑顔だった。

「紗雪……来てたんだ」

「お盆の間は毎日来るって約束だったじゃないですか。忘れちゃったんですか？」

「ああ……そうだったっけ……」

きれいに掃除されて塵一つない畳の間に正座し、紗雪は「えへへ」と笑ってみせる。彼女もまた、静衣にとっての心の拠り所になることを喜びとしているのだ。

「ささ、お風呂へどうぞ。その間にお食事を用意しておきますからねー」

蟲神楽

紗雪が身につけている巫女装束は静衣のお下がりだ。彼女の華奢な体格からすれば少し大きいが「お揃いになるのが嬉しいから」という理由から愛用しているらしい。

当時の農民の娘にしては珍しく、紗雪には学があり習字も達者だったので、家業が忙しくない時期にはこうして巫女として勤めてもらっているのだ。

ともあれ、紗雪のような者が育つほどに、荘園内の農民の暮らし向きは豊かであった。領主たる六車神社が無駄な蓄財をしなかったため、租庸調全てが実質ほぼ無税だったのである。すなわち租は静衣の食い扶持のみ、庸調は神具や衣類、そしてごくまれに行われる神社の改修工事のみだった。

「静衣さま、どーしたんですかぁ？　ぼーっとして……」

「……ん？　うん……いつもありがと」

「そんなまた改まっちゃって、今日はちょっと変ですよぉ？」

「あはは、そうかも。ちょっと疲れたかなぁ……」

部屋に立ちこめた麻[★8]の葉の香のせいだろうか、色々と考えるのが面倒くさくなってきた。

「なんか、眠くなってきたみたい……」

「だ、だめですよぉ……そんな、畳の上に直接寝ないでください！　ああぁ、お布団が汚れちゃう……」

乱れた衣服もそのままに静衣は床に寝ころんで、整えられた寝床へとごろごろ転がってゆく。咎める紗雪の口調も楽しげで、このやりとりを心から楽しんでいる様子だった。

「ねえ紗雪ぃ～、ひざまくらぁ～」

「あぁ……もう、甘えんぼさんなんだから……」

よく干された布団にくるまって太陽の匂いを堪能しつつ、静衣はここぞとばかりに甘えてみせる。きれいに洗濯されて肌触りのよい袴越しに感じる紗雪の腿は、その体温以上に暖かいものを静衣の心にもたらしていた。

「ひゃっ！　ちょ、ちょっと……だめですってば！　先にお風呂に入ってくださいよぉ……」

「う～、ごはんとかお風呂より紗雪の方がいいなぁ～」

「ひゃあっ」

紗雪の華奢な身体を布団に引きずり込み、ぎゅっと抱きしめる。

乳臭さの残る甘い体臭、嗅ぎ慣れた衣服の木綿の匂い、部屋を満たす香の煙、さらに自分自身の汗と埃の匂いが混ざり合って、静衣は何とも言えない充足感を感じていた。

「全くもう……夜中にお腹がすいて目が覚めても知りませんからね」

あきらめるように、しかしあくまでも楽しそうに、紗雪は静衣の求めに応じる。

「んむっ……」

抱きすくめられた身体をさらに密着させ、紗雪は静衣に唇を重ねる。舌と舌が絡まり合い、胸と胸が密着する。白衣越しに擦れ合う乳首から甘く心地よい刺激が生まれ、二人の身体を火照らせてゆく。

「ん……はぁ……静衣さま、とっても可愛い……」

陶然として力の抜けた腕(かいな)をくぐり抜け、紗雪は静衣の胸元に手を伸ばす。白衣と、汗で肌に張り付いていた襦袢(じゅばん)★をはだけると、丼を裏返したような大振りの乳房が露わになった。

「うふふ……うらやましいですよぉ、こーんなに立派なおっぱいして……んっ！」

「ひゃあんっ！　つ、強く吸い過ぎぃっ！」

雪のような白にうっすらと赤みが差した乳房。紗雪はその双球を優しく撫で回し、突端で薄桃色に充血し震える乳首を口に含んで強く吸い上げた。

優しい心地よさに身を預けていた静衣だったが、突然の強い刺激に身を固くした。左右交互に吸引され、舐め回される乳首からは続けざまに快楽の電流が走り、静衣は息をつく間もないほどに甘い嬌声(きょうせい)を上げる。

「んっ、んふぅぁっ！　ソコぉ、感じすぎちゃって……ひぅっ、ひゃめ、やめてぇ」

「んぷぅ……ふふ、じゃあおっぱい舐めるのはやめにしましょうか」

紗雪は意外にあっさりと静衣の要求を受け入れ、乳首から唇を離した。この場の淫靡な空気をそのまま反映するように、唾液がねっとりと糸を引く。

「おっぱいがダメなら、次はこっちですねぇ」

「ふぇ……？」

紗雪は静衣に覆い被さった身体を器用に半身ほどずらすと、手際よく静衣の袴の帯を解き、ずり下ろした。行灯(あんどん)の薄明かりの下にさらされた陰部は火照り湿って、襦袢の裾や袴にまで薄くシミを作っていた。

「うわ、すごい……お汁(つゆ)がこんなに溢れて……静衣さまってばとんでもなく淫らなお身体……」

「いやあっ、そんな恥ずかしいこと言わないで……勘弁してぇ……」

「うふふ、いいじゃないですか。あたしはそんな静衣さまが大好きなんですから」

牝臭を放つ淫裂に顔を近づけ、紗雪は濡れた緋色の小淫唇に舌を這わせる。

「ひゃっ！　そ、そんな所舐めるの!?　お風呂入ってないから汚いよぉ……」

「だから入ってくださいって言ったのに……ん、ぴちゅっ！　んはぁ……静衣さまのココ、すっごく蒸(む)れてこもった素敵な匂い……あたしも興奮して来ちゃいました」

汗と老廃物が混じった、本来不快なはずの匂い。興奮した牝の香りは鼻腔いっぱいに広がり、鼻粘膜から吸収されて、紗雪の体内に同じ興奮をもたらしてゆく。

緩く合わさった淫裂を割り、舌先が膣口を舐める。舌表面のざらつきと膣内壁のざらつきが、互いの微細な突起を愛撫しあうように擦れ合い、その一つ一つから小さな快楽が生み出される。

刺激に応えるように、膣壁の細胞からは分泌液が染み出して静衣の秘部を洪水に変えてゆく。紗雪は豊満

な太腿の間に顔を埋めて溢れる蜜をすすり、犬が水を飲むようにぴちゃぴちゃと音を立てて舐め取った。
「む……んあぁ……紗雪ぃ……」
「んちゅっ……舐めても舐めても次から次に……じゅるっ……ん、美味しぃ……」
鼻息を荒くし、紗雪は一心に舌を這わせる。弾力のある舌先は薄く繁る縮毛を掻き分け、淫裂の上端に位置する小豆へと到達した。
まるで接吻するかのように、紗雪は静衣の淫核に唇を合わせる。ぷちゅぅ、と派手な吸引音がして、包皮に埋没していたその本体が吸い出された。
「ひっ、ひいいっ！　ああっ、そこぉっ！　感じすぎていひぃいっ！」
充血し膨れあがった肉芽をさらに強く吸い、チロチロと舌の表面で転がす。膣口を舐められる穏やかな快楽から一転した、一種暴力的とも言える強烈な快感に静衣は身体を仰け反らせて、大きく官能の喘ぎを発した。
「んちゅっ、ん、ぷぅ……ほら静衣さまぁ、おててはそこじゃないですよぉ」
紗雪は紅潮した顔を起こすと、涎と愛液が光る唇を拭おうともせず、静衣の腕を取る。快楽を耐えるように布団を握りしめていた両手は、紗雪の導くままに静衣のはだけた胸へと乗せられた。
「あ、あぁぁ……ひきゃうううっ！　上手すぎぃっ！　っ……!!」
元の位置に戻った紗雪は再び吸引を始める。それに合わせるように静衣は嬌声を上げ、しがみつくように自らの豊満な両胸を握りしめた。愛撫の余韻で紅く充血した乳首が指の間で押しつぶされ、刺すような刺激が走る。三つの肉豆から同時に与えられる快楽に脊髄を満たされ、息を詰まらせながら静衣は絶頂を得た。
「――っあああぁっ！　ハアッ、はあぁっ……ひ、ひやあっ！　そんな、ダメえっ！　今イッたばっかりなのにぃ！　いっ、ひきいいいっ!!」
達してもなお、紗雪は舌による愛撫をやめようとしない。一心不乱に淫核を吸い、舐り、舌を擦りつける。二度目、三度目と続けざまに快楽の極みに押し上げられ、静衣は反り身になってガクガクと痙攣しながら、性器から頸管粘液の奔流を断続的に垂れ流した。
「ハッ、ハァッ……あああぁ……いや、いやあぁ……」
「んっ……ふふふふ、静衣さま、すごく気持ちよさそう……遠慮なさらないでもっともっと何十回でもイッちゃって下さいね」
半分呼吸困難のような状態に陥って弱々しく喘ぐ静衣を、紗雪は愛情いっぱいのサディスティックな目で見守る。そして再び静衣の陰部に舌を伸ばした。
「やあああああああっ!!」
「きゃっ！」
今までほとんど無抵抗だった静衣が、突然両腕で紗雪を突き飛ばしたのだ。
「いやあっ！　やめて！　父さまやめてええっ！　母さまを連れて行かないでええっ!!」
「静衣さま……？」
突然わめき始めた静衣の様子に手が付けられず、紗雪は畳の上に座ったまま呆然としていることしかできない。錯乱して泣き始めた静衣の顔は、血の気の引いた青白いものになっていた。
「いや、いやだよぉ……こんなことするなんて、私のこと大事じゃなかったの……？　ねぇ……寂しいよぉ、怖いよぉ……」
「静衣さま、静衣さまってば……大丈夫、何もしませんから、しっかりして下さい」
弱々しく泣きじゃくる静衣に、紗雪はしっかりとした口調で話しかけ、優しく抱きしめる。噴き出す感情に震える肩は、華奢な腕の中で徐々に落ち着きを取り戻していった。
「ううう、うぁ……紗雪ぃ……」
「静衣さま？　落ち着きました？」
「ごめんなさい……私ってば取り乱して……」
「いえ、そんな……あたしが悪いんです。静衣さまのことも考えずに調子に乗って……」
今度は紗雪の方が泣き出しそうだ。
「いいえ、紗雪は悪くないわ。ただ、その……時期が時期だからちょっと……そう、ちょっと思い出しちゃっただけ……」
三年前、六車神社の宮司であった静衣の父は『閉門の儀』が終わったその夜に、突然魔物に憑かれて発狂した。理性を失った父は静衣を犯し、母を無理矢理に連れ去り、そのまま行方知れずになった。
本来なら★1神祇官に届け出なければならない事件だ。だが、魔物を抑え込むべく建てられた社の宮司たる者が、魔物に憑かれて姿をくらましたなどとなれば、それは許されがたい汚点となる。それこそ、神社そのものの存続も危ぶまれる。
届け出るか否か迷ったまま、三年が過ぎた。
静衣にとって神社の存続や勅命はもちろん大事だったが、それよりも心配だったのは荘園の領民だ。
平安初期からの朝廷の威光によって持ちこたえてきた伝統ある神社が、その実体を失ったと周辺を支配する守護たちに知れたら、荘園はたちまちにして無法者の武士によって支配されてしまうだろう。それは領民達にとって、豊かな暮らしから絶望的な農奴の暮らしへの転落を意味していた。愛する紗雪とも今まで通りの関係を保つことができなくなる。
そして何より彼女の心のどこかには、正気を取り戻した父と母が帰ってくるのではないか、という思いが依然として強く残っていたのである。
純潔を失い、閉門の儀を行えなくなった彼女にとって、盆は苦しい闘いを強いられる時期になった。それでも、出来合いの結界の力で『門』から現れた魔物を一匹一匹討つというやり方で、過去二年どうにか役割を果たしてきたのだった。
抱きしめられた身体をより密着させるべく、静衣は両腕を紗雪の背に回す。

蟲神楽

「大丈夫。盆も明後日で終わるから……集ってくる死者の霊が少なくなれば、門は自然に閉じるわ。そうすればまた一年は今のまま居られる……」

すっかり落ち着いた静衣は、自分の気を引き締めるように語る。だがその表情には、疲労の影が色濃く宿っていた。

外はいつの間にか本降りの雨になっていた。

*

「う～、身体がかゆい……」

「だからお風呂に入って下さいって言ったじゃないですか！　もう……」

障子越しに差し込む朝日がまぶしい。どうやら昨夜はあのまま寝て、寝ている間に雨も上がったようだ。

「ぷっ……静衣さまったらすごい髪の毛」

「え、あ……うわぁ……」

紗雪に笑われて頭上に手をやる。見事なまでにボサボサだ。その上、片手を上げたことによって白衣の前がはだけてしまった。そういえば半裸で寝ていることも忘れていたようだ。

「せ、静衣さま……服ぐらいちゃんと着てください……」

「何よぉ、脱がしたのは紗雪でしょ……」

まだ半分寝ぼけた様子でブツクサつぶやきながら、静衣は白衣の胸元を合わせる。そしておぼつかない手先で、袴の紐をゆるゆるに締めた。

「じゃあ、お風呂に……」

「待ってください！　いくら夏でも一晩経てば冷めてます。しっかりして下さいよぉ」

「あ、そっか……そうだよね……ごめん、せっかく沸かしてくれたのに……ええと……」

一晩寝てもなお昨日の疲れが取れていないのか、静衣の受け答えはかなりボケボケだ。

「お風呂は私が沸かしますから。静衣さまはもう少しお休みになっていて下さい」

「うん、ありがと……」

血のつながりはなくとも、紗雪は静衣にとって、まるで世話焼きの妹のような存在だ。安心して甘えられるこの妹の心遣いに感謝しながら、静衣はもう一度布団に横になった。

*

「静衣さま！」

それから数瞬と経たないうちに、引き返してきた紗雪によって再び起こされた。

「何か、外に村の人たちがたくさん集まって……」

「わかりました。すぐに行きます」

布団から身体を半起こしにして答える。来客とあれば仕方がない、とりあえず風呂は諦めた方がよさそうだ。乱れた髪と衣服を簡単に整え、静衣は紗雪に代わって応対に出た。

外に集まっていたのは二十人を超える男女、静衣の良く知っている領民たちだ。全員が社務所に至る道の左右に分かれて、きれいに道をつくって立っていた。

その間から堂々と胸を張って歩いてくる見覚えのない男がいた。烏帽子(★1)に絹製の絢爛(★2)な狩衣姿という、一見して貴族と分かる服装。さらには体格の良い従者二人を従えている。

京に近いとはいえここは山間の田舎だ。珍しい来客に、村の者がみな何事かと集まってきたというわけだ。

「もし、宮司(★3)は居られるかの？」

色白で下ぶくれの容貌に相応しい、中年男性にしては甲高い声が発せられる。

「失礼ではございますが、どちら様で……」

「儂は都より参った陰陽師(★4)、十枝小麻呂と申す……これで良いか？　ならば宮司に取り次いでもらいたいのじゃが……」

色白の貴族は狩衣の袖で汗を拭いつつ話す。細長い声色は『儂』という一人称が全く似合わない。

「申し訳ありません。あいにくと宮司は不在でありまして……」

あいにくも何も、三年前からずっと不在だ。とはいえ、その実態を神祇官に知られるわけにはいかない。

（何とか上手い具合に帰ってもらわないと……）

良い考えはないものかと案じながら、静衣は話を先に進める。

「ですが、ご用向きは私が承ります」

「ほう？」

静衣の返答に小麻呂は細長い目を少しだけ丸く見開く。そして、まるで子供を諭すような口調で続けた。

「いやしかしのう……何というかこのような由々しき問題……うーむ、其方の手に負えるとはちと思えぬのでのう。やはり神職の者でなければ……」

（まずい……）

『由々しき問題』のところで見物人たちがざわめき始めた。どうもここでこのまま押し問答していては旗色が悪そうだ。

「こちらへどうぞ」

ちょうど良いタイミングで奥から紗雪が顔を出した。客を入れられるように今まで部屋を片づけていたのだろう。手際がよい。

「では……皆様は一度自宅へお戻り下さい。今日のことはまた後ほど報告しますので。十枝様、こちらへ……」

静衣のその言葉を最後に、従者を含む五人は社務所の奥へと消えてゆく。残された領民達はしばしそのままどうしたものかと留まっていたが、三々五々家路についた。

*

小麻呂を招き入れたのは六畳ほどの客間だ。滅多に使うことはないが、すぐに準備が整ったのは普段から

紗雪がよく片づけていたためだろう。
「ほぉーっ……いやいやいやこれは有り難い。何しろ外は暑くてのう……」
小麻呂は出された冷茶をごくごくと飲み干し、心持ちなめらかな口調で話し始める。
「して、儂らはここで宮司殿の帰りを待てば良い、ということかの？」
一日や二日待っていても宮司は帰ってこない。どこまで、どのように説明するか——静衣は考えながら話を進めなければならなかった。
「先ほども申しましたように、ご用向きは私が承ります。宮司が留守の間は大体のことを任されておりますので」
「ふむぅ……いや、とはいえ……其方は巫女であろう？」
「いいえ、伝統的な理由でこのような格好をしていますが、私も神職です。身分と致しましては禰宜（ねぎ）ということになるのですが……」
「む？　其方、もしや宮司の娘か!?」
「はい。申し遅れました、六車静衣と申します」
「なんと！　そうかそうかそうであったか！　いや、それならば話が早い。ホホホッ！」
小麻呂の表情が一気に明るくなった。細長い目はますます細長くなり、小さな口からは品があるのか無いのか分からない、気味悪げな笑いが漏れる。
「さて……すまぬが其方と、それからお前達も……ちと席を外してくれんかの？」
小麻呂は再び茶をすすり呼吸を整えながら、紗雪と従者に命じる。すぐに、まるで心外と言わんばかりの声が上がった。
「え——っ！　私もですか!?」
「こ、こら、紗雪……」
「あ……ええとその、ごめんなさい……でも……」
紗雪は何か言いたいことがありげに、静衣と小麻呂へ交互にちらちらと視線を送る。
「あとでちゃんと聞かせてあげるから、ね？」
心配してもらえるのはありがたいが、あまり無礼を働いて話をややこしくしてもらっては敵わない。静衣が小声でなだめるように諭すと、渋々ながら紗雪は立ち上がった。
「……わかりました……あの、もし危なくなったら大声で叫んでくださいね。すぐに駆けつけますから！」
「何か酷い言われ様じゃな……」
小麻呂がすぐそばで聞いていることなど全くお構いなしの発言に、静衣は無言で苦笑いを浮かべるほかなかった。

＊

紗雪と従者達が退室すると、部屋の中は静衣と小麻呂の二人きりとなってしまった。
細い目で真っ直ぐに静衣を見つめ、おもむろに切り出す。
「さて、つかぬ事を訊くが……其方、魔物ではあるまいな？」
「へっ？」
あまりの質問に静衣は思わず間の抜けた声をあげてしまう。細い目で薄笑いをしているような表情からは汲み取れないが、口振りは真剣だ。
「あるいは、魔物に憑かれたりは……」
「ご冗談を。もし私が魔物やあやかしの類なら、十枝様にお会いした途端に討たれておりましょう」
「うーむ、そうか……いや失敬失敬。そうであるな……確かに其方は紛れもなく人間じゃ。じゃが……」
（やっぱりこの人……『門』のことに気がついている……？）
静衣は焦った。この十枝小麻呂という人物はおそらく、祓所から漂う魔物の気配に気がついているのだろう。陰陽師なのだからそれも当然なのだろうが。
「この社に溜まりし妖気、ここに住む者がそれについて何も知らぬとは思えぬ」
（しらを切って帰ってもらうのは無理か……）
静衣の心に動揺が走る。動揺はそのまま表情に現れ、小麻呂へ肯定の意を伝えていた。
「やはり訳ありのようじゃの……いや、近ごろ都の貴族たちの間で噂になっておるのじゃよ。六車の社が魔物の手に落ちたとか、あるいは宮司が魔物に心を売ったとか、はたまた魔物を飼い慣らして淫行に耽（ふけ）っておるとか……」
「そ、そんな！　私どもは決してそのようなことは……」
「まあ、皆も本気で言っておるわけではあるまい」
残り少ない茶を、ずずっ、と飲み干し一息つくと、小麻呂は身を乗り出して畳みかけるように語り始めた。
「しかしのう、其方がお父上からどのように聞かされていたか知らぬが、六車神社は破魔の分野では結構な名門なのじゃよ。そこでの不祥事は、神道に関わる者全てにとって避けたいものじゃ」
「心得て……おります……」
だからこそこれまで一人でひっそりと辛い戦いに耐えてきたのだ。うつむく静衣は、今や小麻呂の目を直視することができなくなっていた。
「ホホホッ、そんなに心配せずともよい。儂は其方の味方じゃよ。よいか？　事を穏便に収めたいのは儂とて同じ……どうか詳しいことを話してくれぬかのう？」
（良かった……この人は味方だった。この人に頼れば、一人で先の見えない戦いを続けなくて済むんだ）
そんな思いが起こると同時に、甲高い小麻呂の声が不思議と不快なものでなくなってゆく。張りつめていた気持ちがほぐれ、これまで堪（こら）えていた涙が次々と溢れ始める。静衣は嗚咽が漏れないよう、乱れた呼吸の合間合間に言葉を挟み込んで答えた。
「全てを……お話し……申し上げます……」

蟲神楽

*

「あっ、十枝様……あの、お話しというのはもう……」
別室で待っていた紗雪と従者の前に小麻呂が姿を現した。
「うむ……済まぬがもう一仕事出来てしまったのでな。今しばらく静衣どのを借りるぞよ」
静衣の姿は見あたらない。紗雪は不安になって尋ねた。
「そ、それで静衣さまは……」
「先に行っておる。危ないから其方は来てはならぬそうじゃ。すまぬが儂としても、祈祷の邪魔をしてもらっては困るからの」
「……では、今からお祓いを？」
邪魔者扱いされて不機嫌そうな顔を一瞬見せた紗雪だったが、それはすぐに静衣の体調を案じる表情に変わった。こんなことなら昨晩、無理にでも夕食を食べさせておくのだった、お風呂にも入ってもらうべきだった、もっと早く寝かせておくべきだった。様々な心配事が脳裏を駆けめぐる。
「ホホッ、其方のように心配してくれる者がいて静衣どのは幸せじゃのう……じゃがしかし、彼女は強いお人じゃ。信じて待つのも大切な事ぞ？」
「はぁ……」
それだけ言うと小麻呂は踵を返し、祓所の方へと立ち去っていった。紗雪はその背中を、どこか納得のいかない思いで見送っていた。

*

「ふむ……なるほどなるほど、これが『門』か。異界のモノが混ざった空気、沸き出す魔物の気配、集まる死者の霊……確かに文献の通りじゃな」
注連縄の際に立ち、小麻呂は宙に浮いた闇の塊をしげしげと眺める。忌々しさよりも、どこか未知の存在に対する好奇心のようなものを感じさせる口調だ。静衣は少し不安になった。
「私の力不足で、ここまで拡大させてしまいました……」
忌々しげに闇を睨み、静衣は唇を噛みしめる。恥部を見られる思いだ。
「どうやら、のんびりと話し込んでいる時間も無さそうじゃの。『門』の向こうで巨大な魔の気配が膨れあがって来ておる」
「管魔……！」
「左様。遙か昔、平安の遷都から間もない嵯峨天皇の世に突如現れ、その治世を砕かんとした異形の存在じゃ。六車神社がその再来に備えて建立されたことは知っておろう？」
静衣はさらに強く唇を噛んだ。己の一族に与えられた使命、それを自分が全うしていないことを改めて指摘された思いだ。
「いやいやいや、儂はそなたを責めておるのではない。過去を悔いても仕方なかろう。それよりも大事なのは今日、これからであるぞ？」
「心得ております」
「では、今一度説明いたそうかの。まず、儂の式神が其方の『気』を呼び起こす。その『気』を以てして、管魔を現世側へ誘い出す。其方に気を取られている隙を衝き、儂が全力をもって管魔を討つ」
小麻呂の立てた作戦はごく単純で、不意を衝けば管魔を葬ることが出来るだけの能力を小麻呂が持っている、という仮定に基づくものだ。
管魔が恐るべき存在だと知っていてなお自信満々で居られる。それだけの力をこの人は本当に持っているのか？　ただの自信家ではないのか？
（大丈夫、大丈夫、大丈夫……）
脳裏に浮いた疑念と不安を必死にうち消すべく、静衣は胸に両手を当てて大きく深呼吸した。
やや厚手の白衣越しに自分の鼓動と胸の柔らかさを感じる。脱いでくるように言われたので襦袢は身につけていない。そういえば何故そんなことを命じられたのだろう？　小さな疑問を抱えたまま、静衣は自ら作った結界の中へ足を踏み入れた。
「念　均破羅　依内是異　斤汰訶　須宜陀　娑婆訶……」
小麻呂の唱える力ある言葉――言霊に導かれて、彼の身につける狩衣の袖が大きく膨れあがる。程なくしてそれは、布の色と同じく白い、二体の影となって衣服から分離し、宙を舞って、結界の中で待つ静衣の周囲をぐるぐると取り巻き始めた。
始めて目にする式神に、静衣は無言のまま戸惑うような表情を見せる。そんな彼女の心の動きなど全く介さぬ様子で、白い影はその目的に合致するよう、その形状を変化させてゆく。
「む、蟲……!?」
凝縮した影がとった形は白い筒の束ともいうべき外観であった。まるで双子葉類の根のように、中央の太い棒から全方向へ側枝が伸び、『無数のトゲが付いた棒』といった形状を作り出す。
白く長いトゲの一本一本はおおむね半寸ほどの直径を持った筒状で、表面は全て半透明の繊毛で覆われていた。触角と口までついて、さながら巨大な白い毛虫といった容貌だ。
（気持ち悪い……）
全長二尺ほどの円柱状の本体にびっしりと毛が生えそろっているその様は、毛虫やゲジゲジのような多足類の身体を思わせる。不気味なその姿に、静衣は軽く吐き気を催した。
「蟲などではない。姿に馴染めずとも其奴らは儂の式神じゃ。決して危害は加えぬゆえ、心静かに……」
「は、はい……」
諭されて返事はしたものの、このような異形の生物を目の前にしてはそう簡単に落ち着くことなどできな

い。とりあえず、驚きのためにほとんど止まっていた呼吸を再開するべく、静衣はぎこちなく息を吐いた。
「……うひゃうぅっ!?」
その瞬間を狙っていたかのように、二匹の式神は宙を素早く這い、それぞれ静衣の胸元と背中へ滑り込んできた。
感触は、まさにナメクジそのもの。ねっとりと粘度の高い液体で覆われた体表面が、肌に吸い付くように密着し、ひんやりとした感触とともに静衣の体温を奪う。
得体の知れない不快感に総毛立ち、青くなる静衣。その白衣と身体の間で窮屈そうに、式神たちはその異形の肉体を延々とくねらせた。
「ひいいぃ、いやっ、何、気持ち悪いぃっ！　ぶよぶよして、せ、背中あぁっ！　あうぅぅっ！　お、お戯れを！　十枝様、こ、これはひぃぃっ!?」
トゲと呼ぶには柔らかすぎる、短い触手と言うべき分枝組織が間断なく、キメの細かい静衣の柔肌を舐めるように撫で擦る。
背中に入り込んだ式神は、背筋のくぼみに沿ってゆっくりと回転しながら上下に這い、白い肌に分泌液を塗りつけてヌルヌルに濡らしてゆく。触手よりもさらに柔らかく細かい繊毛が、毛穴の一つ一つにまで入り込んで、老廃物をこそぎ落とし、粘液を擦り込む。
肌が直接感じる触覚こそ柔らかい軟体生物のものだが、その実態は経絡を強烈に刺激するくすぐり責めだった。
「徒に戯れておるのではない。此奴等は其方の気の流れを良くするため、経絡を按摩しておるのじゃ」
「いぅぁ、あっ、ひいぁぁっ！　おなか、くすぐったひいぃっ！　ひゃっ、ひゃあっ！　やめてぇ、許して、これ、取ってえぇぇっ！　ひっ、ひゃめひぃぃっ！」
(苦しいっ！　息が出来ない助けてえっ!!)
二匹の式神は触手を自在に操り、静衣の全身を同時に責め始めた。粘液をたっぷりと帯びた繊毛が、首筋から耳を舐め回す。束になった触手が脇に吸い付き、その内で振動する繊毛が敏感な神経をくすぐる。
胸に比べてかなり慎ましやかな腰回りも、脇腹から下腹にかけてぐるりと取り巻いた式神がくすぐり、腹筋が攣るほどの刺激を与える。
「ホホホッ、たとえ掴むことが出来たとしても、人の力では此奴等を引き剥がすことは出来ぬぞ？」
「あー、ひいぃぃっ！　いきひぃぃっ！　ひゃめ、やめへぇ、このおおひぃっ！　い、いあぁっ！」
ドサリと派手な音を立てて、静衣は仰向けに倒れ込む。そして自分の身体を責め立てる式神を引きはがそうと、半狂乱になって捕まえにかかった。だが式神は、その見た目からは信じられないほどの速さで彼女の体表を這い、常に静衣の手を逃れながらくすぐり責めを続行するのだ。
ブヨブヨの不快感と激しいくすぐりが相まって、静衣は完全に呼吸困難に陥っていた。吸うことも吐くこともままならなくなり、意識が遠くなる。そう思ったすぐ後だった。
「んはあああぁぁ――っ！」
もの凄い声が出た。静衣はそれが自分の発したものであることを理解するのに数瞬、自分が何をされたかを理解するのにまた数瞬を要した。
「ふ……ぇ……？」
(なに……？　今の……急にビリッとしたような……)
全身へのくすぐり責めが一気に止んだ直後、両乳の上に小山のごとく覆い被さった式神が、両の乳首を同時に舐めたのだ。
痙攣と呼吸困難の苦しみに代わって、突然与えられた性的な快楽。それはかつて味わったことのない、それこそ紗雪の懸命の奉仕でも実現できないであろうほどの、強力かつ甘美な快楽だった。
「ど、どぉして……こんな……あ、ひゃうぅぁっ！　こんなあー、あ、あああっ……」
戸惑いの声を発するその身体に追い打ちがかかる。茹でたての餅のように柔らかな乳房が、あらゆる方向から触手に掴まれ、揉みしだかれ、目一杯変形する。硬く勃起した乳首はその中で転がし弄ばれ、柔らかな繊毛の刺激を、それこそ乳腺の入口に至るまで全ての皮膚表面で快楽として享受した。
制御のできない快楽に、静衣の発する言葉はほとんど意味を為さなくなる。くすぐられている時は青かった顔色が一気に紅潮し、涙を浮かべた目はその焦点が怪しくなり、緩んだ口許からは小さく涎が垂れる。
「と……十枝様ぁ……なにゆえこのような……わ、私の身体は……」
「うむ。上手くいったようじゃ。さあ、これからが本番ぞ。其方の発する淫気をもって管魔を呼び寄せるのじゃ！」
「い、淫気……？」
「左様。女性の発する淫蕩なる気。その気こそ、管魔が己の世界を形作る力の源なのじゃ。そもそも、彼奴が現世に干渉するのも、この淫気を得んがため……」
「そ、そんなこと聞いてなぁっひいいいいいいいぃ!!」
火照った脳で説明に聞き入っていたところに、さらに強い刺激が加わる。乳首をゴシゴシと洗うように運動していた繊毛のうちの二本が、細いままながら長く成長し乳頭から真っ直ぐに両の乳首の中へ貫入したのだ。
肉を貫かれる苦痛は不思議と少なく、代わりに小さな落雷が起こったかのような激しい快感が乳首に生まれた。
「ホホホッ、効いておるな。如何じゃ？　乳首を内から犯される感覚は格別のものじゃろう？」
「あっ、あ――っ!!　あぁぁっ！　ひう、ひうぅっ!!　ぎうううぅぅっ!!」
乳腺を押し広げるように乳首の中へ貫入した繊毛触手は、その細い体をグリグリと捻り、周囲の組織に激しい刺激を与えながら奥へと突き進む。激痛と言える

その感覚も、混線を起こした現在の静衣の脳にとっては、ずば抜けて甘美な快楽でしかなかった。必死に正気を保とうとするかのように、静衣は床に爪を立てて、獣のような声を発し大きくのけ反った。

「ホホホホッ、かような快楽、なかなか味わえるものではないぞよ？　其方は最初に此奴等を見て目を背けたが……儂はのう、この姿こそが快楽を、そして淫気を生み出すのに最も優れているからこそ、此奴等を生み出しだのじゃ。ホホホッ、そう思うとどうじゃ？　少しは愛おしく見えてこぬか？」

仰向けに寝転がり、快楽に震える静衣を見下ろし、小麻呂は悠然と語りかける。

「それとも、今は己の快楽を貪るのに忙しくてそれどころではないかの？　何せ今の其方は全身の経絡を繋ぎ変えられ、少々の苦痛は全て快楽へと変わってしまう身体じゃからのう」

「け、経絡って……その、最初に……」

惚けた頭で必死に情報を整理する。何ということか、儀式が始まって一刻と経たないうちに静衣の身体は、不気味な軟体生物に犯されて喜ぶ狂った肉体へ堕とされてしまったのだ。

「あ、あぁぁ……あぁぁ……」

正常な人間の感覚を失ったショックと、正常な人間では決して得られない快楽への期待が混じり合い、ぶるぶると震えながら静衣は意味を為さない呻きを吐いた。

「ホッホホホ、身体は堕ちたが心はまだせめぎ合いが続いておるか……じゃが、其方はもう、心にも浸食を受けておる。此奴等がそなたの肌に塗り続けておる粘液、これがまた変わった薬効を持っておってのう……」

「え……」

緊張に固まった首をわずかに動かし、静衣は粘液の塗られた箇所を確認する。やや生臭い匂いを放つその液体は、ほぼ全身の皮膚にタップリと付着し浸透していた。

「媚薬じゃよ。それも、一滴浴びればいかなる淑女も発情した牝に変えると言われるほど強力な霊薬じゃの……そういったモノが数種混合されておる」

「うそ……うそよぉ……そんな、そんなぁ……」

全身の筋肉を緊張させて必死に現実を拒んできた、その目が絶望に見開かれる。淫蕩に耽ることしか叶わぬ身体にされ、心の箍をも砕かれ、静衣は傀儡へと成り果てる――

「人外の快楽、受け容れる覚悟は出来たかの？　ホホッ……では、気を遣ってしまうがよい！」

小麻呂がそう命じると、胸を責めていなかったもう一匹の式神が跳ねるように這い始める。式神は紫袴の脇から中に入ると、すっかり発情しきって攻撃を待ちわびるように濡れ果てた淫裂へと這い進む。そして、びっしり宿った繊毛を全て擦りつけるように、ずるりと一回股間を撫でた。

「ひゃあああああああ――っ!!」

生理的に漏れ出たものの中に、何かから解放される喜びのようなトーンが混ざった、そんな清々しい嬌声を上げて、静衣は快楽の頂点に達した。

（と、溶けるっ！　己の魂が溶けてなくな……）

「あーっ、はぁーっ、はぁーっ……」

瞳孔の開きかけた眼で宙を凝視し、呼吸を整える。自失感の中で感じた快楽が徐々に薄れ、再び現実へ引き戻される。自我を取り戻す安心感とは裏腹に、静衣の心の内は早くも、再び忘我の境地に追いやられたいという気持ちに支配されかかっていた。

（こんな……異形の者にいいようにされて……でも……）

媚薬によって植え付けられた欲求が、この生涯初めて味わう桁違いの快楽を再び寄越せと身体を疼かせる。それはまるで一日おいたあとの切傷のように、ジクジクとむず痒い感覚をもって彼女の意思を蝕んでいた。

巣くい始めた新たな感情を振り払うように、静衣はギュッと口元に力を込める。そして、今は沈黙する式神を刺激しないよう、身体を硬直させたままゆっくりと口を開いた。

「……わ、私を謀った……どうして……」

「なんとなんと、謀ったとは酷い言い様じゃ。それもこれも全て管魔をおびき寄せるための儀式じゃと申したではないか……忘れたか？」

「くぅぅ……で、でも……これじゃ私の……私の方が……先にっ……」

「ふぅむ……しかしながら、まだ足りぬか……」

ギリギリの心理状態を訴える静衣をほとんど無視して、小麻呂は『門』を睨む。闇は変わらず邪な気を保ったまま動かない。小麻呂の言うとおり、管魔を呼び出すにはまだまだ淫気が足りないのだろう。

小麻呂は闇から床へ視線を転じ、再び静衣を見下ろす。そして口許をニイッと歪め、嗜虐的な笑みを投げかけた。

「ならば、其方の身をもってさらなる淫気を生んでもらう他あるまい。ホホホホホ！」

「ひっ……！」

（いやあっ……怖い、怖い怖い怖いっ！　また、また自分が無くなっちゃうっ！）

甲高い笑いに合わせて、式神たちが踊るように活動を再開する。

まずはじめに、びちゃびちゃっと水音を発したかと思うと、乳管洞深く打ち込まれていた触手の胴体がゆっくりと引き抜かれた。

「く……ふあ、あっ……んっ……くぅっ……」

食いしばる歯の間から甘い喘ぎが漏れる。弾力の強い繊毛が、敏感きわまりない乳洞孔の内壁を一寸一寸ジリジリとこそぎ、取り繕われた薄っぺらい抵抗の意思をはぎ取ってゆく。

たった一度の絶頂によって心の底に植え付けられた淫欲が、出来たてのカサブタを一層ずつ剥ぐような快

楽を伴って徐々にむき出しにされてゆく。
「はぁっ……ふっ、くぅん……あ、あぁ……」
不自然なほどに抉られた乳管洞は赤黒く充血しながらも、くわえ込んだ触手をギュルギュル締めるように痙攣する。そこで生まれた新たな快楽が、静衣の神経へ強制的に作り物の幸福感を送り込んでくる。
（嘘よ……ちっとも嬉しくなんかない……はずなのに……どうして……）
まるで不可視の糸に操られているかのような、意思に関係なく快楽を求めてうごめく自分の身体に、静衣は言い様のない恐怖を覚えた。
「ホホッ、如何した？　そのようにつまらぬ抵抗などせず、身を委ねて良いのじゃぞ？」
あざけるような言葉が、必死に均衡を保とうとする精神にのしかかる。それに抗弁しようと静衣が口を開いた瞬間を狙ったかのように、触手達は無慈悲にも両乳首の奥深くへと戻っていった。
「――!!　んひいいいっ！」
神経を直接撫でられるような刺激に、喉の奥が押しつぶされたような悲鳴が漏れる。握りしめていた上衣の裾から手を離すと、静衣は一度気を遣った時と同じ姿勢に反り返り、身体を支えるように床に爪を立てた。
「あ――っ！　あーっ！　奥うっ！　裂けるっ！　壊れ……ぎうぅっ!!」
乳首を押し裂かんばかりの激しい挿入、そして次々と襲い来る激痛と区別がつかない快感に、静衣は自分の抵抗の意思がいかにちっぽけなものであったかを思い知らされていた。
ならばいっそのこと、小麻呂の言うとおり己の意思など放棄して、与えられる快楽に身を任せてしまおうか。そんな考えが生まれた途端、身体の内にくすぶっていた淫欲と身体の外から与えられる快楽とが、割符の一致するかのようにぴたりとかみ合った。
「くあぁぁぁ――っ、あっ、あ――っ！　凄ぉ、おっ……おっぱいがぁ、中から壊されるぅっ！　ひっ、いいっ！　だめぇ、凄い気持ちいいいっ!!」
「そう！　そうじゃ、良きかな良きかな！　ホホホッ、そうして淫らな衝動に身を委ね、もっと淫蕩なる気を発するのじゃ！」
叫び暴れる度にぷるぷるとたわむ乳房の上で、式神の白い身体が悠々と揺れる。視界の下端にその様を捕らえながら、静衣は自分の意識がまた忘我の域に追いやられているのを感じていた。
卑しく淫らな身体にされて、異形の式神に胸を犯され、惨めに床に這いつくばって、あまつさえそれを気持ちよいと感じ、声にまで出している……
静衣は、弄ばれることを悦びとする被虐の悦楽に浸りきっていた。
「ホッホホ、その様では胸だけでは物足りなかろう？　さてさて、いかが致そうか……『豆磨き』などどうかの？　ホホッ！」
「あ、ふぅぁ……ま、豆ぇ……？」
（豆磨き……豆……豆ってまさか……）
混線した思考の中で、息絶え絶えになりながら尋ね返す。
だが、質問の必要はなかった。小麻呂の言葉を聞き取って、式神たちがすぐさま『豆磨き』に取りかかったのだ。
「んっ……んあああああっ!!　ひぃっ！　ぬるぬるしたのが、あ――っ！　あっ、ああっ！」
変化は袴の下で起こった。陰部をすっぽりと覆っていた式神が不意に脈動し始めたかと思うと、多足類の脚を思わせる触手が淫核を剥いたのだ。
隙間を埋めるように押しつけられてくる無数の柔毛が、異常なほどに紅く充血した淫核をゴシゴシと撫で擦る。
既に皮膚から十二分に媚薬を吸収し、愛撫を期待して疼きに耐えてきたその淫らな豆は、当然のように悦び震えて見る間にその体積を膨らませてゆく。
「こっ、こすられへぇ、えあああああっ！　磨きっ……てぇ、こん、なあぁっ……」
（離れて！　引きはがさないと……頭おかしくなっちゃうっ！）
顔を真っ赤にし、大慌てで静衣は袴の裾をたくし上げにかかる。二度三度、掴み損ねて宙を掻いた後、白く豊満な太腿が露出した。その付け根、股関節から下腹までべっとりと覆い被さる真っ白な式神の身体に指がかかる。
（……っ!!　剥がれない……!）
式神の体表に生えた触手は吸盤と化し、内腿と下腹の柔らかな皮膚にピッタリと貼り付いていた。生半可な力ではとても剥がせそうにない。
外見にはただ穏やかに軟体生物が留まっているだけだというのに、その体の下では休む間もなくうごめく触手によって敏感な淫核がなぶられ続けているのだ。手が届くのに止められないそのもどかしさと切なさが、静衣の被虐心をさらに加速させた。
「ホホホホッ！　磨け磨け、玉を磨くように丹念に丹念にのう……気持ちよかろう？」
「ハアッ、あっ、剥がれぇ……えぅんっ、んあっ、あぁっ!!」
（ああっ、もうどうしようもない……このままイカされちゃう……!）
微動だにしない式神を両手で押さえつけたまま、静衣は観念したように目をつむる。トドメを刺すように、双乳へめり込んだ触手がぐるりと乳管を抉った。
「あっ……ックウウウッ!!」
間断なく淫核を磨かれる快感に、乳腺を内から磨かれる快感が重なり合う。三点から同時に発する信号が体中の細胞を賦活させる。火照った身体の隅々に染み渡る快楽を全身で味わうように、静衣は絶頂に達した。
「はぁーっ、はぁーっ……あぁっ、いあ、いやぁ……そんな、さっき……にぃっ……」
式神は責めの手を休めない。さながら好物の葉にむしゃぶりつく芋虫のように、がっちりと静衣の胸と股

蟲神楽

間にしがみついたまま、ヒクヒクと小さく脈動し続ける。
　白い芋虫の下では、三つの豆が常時磨かれ、気が狂わんばかりの快楽を生み続けていた。
（またイクッ！　さっきイッたばかりなのに……怖い、止められない、止められないよぉ……ああ、でも身体が火照ったままで……気持ちよすぎて自分が抑えられないっ……）
　静衣の脳裏でまた一本線が切れた。堅く瞑っていた目を開いて天井を見つめる。
　快感のあまりに緩んだ涙腺からは涙が溢れ、口の端からは涎が垂れる。歪んだ視界と同様、不安定に揺れていた心の内が徐々に一つの感情に染められてゆく。瞳は悦びに光り、享楽に歪んだ口許から淫らな善がり声が発せられる。
「すごぉい……またイクぅっ！　あんっ、ああんっ、お豆が、淫らですごいのぉっ！　いちゃうぅ、頭バカになっちゃふぅうっ！　すごいぃ！」
　言葉にしたことで拍車がかかったか、静衣は立て続けに気を遣り始めた。一息吐くごとに一度ほどの間隔で、溜まった快楽を爆発させる。淫蜜がどくどくと溢れ、ジュルジュルと下品な音とともに式神の身体に啜り取られてゆく。
「あふぅんっ……くぅ、くぅんっ！　イイッ！　お豆気持ちいいよぉ、おっぱいほじられるのも最高ぉ……もっとしてぇっ！」
「ホホホッ、浅ましきかな浅ましきかな！　其方、本当に神職か？　まるで発情した牝犬ではないか！」
　楽しげに笑う小麻呂の言葉に、静衣は一瞬だけ辛そうな表情を見せた。だがそれもすぐに、湧水のごとく溢れ出る淫らな感情に押し流されてあっさりとかき消されてしまう。脳に残ったのは『牝犬』という被虐心を煽る言葉だけだ。
「あ……あうぅ……牝犬ぅ、牝犬イキますっ!!　お豆いじくられてイクぅっ!!」
（こんな、蟲みたいなヤツに何度も何度もイカされて……でもぉ、抵抗なんてもう出来ないよぉ……）
　宝石を研磨するように、丁寧にブラッシングされる淫核は、式神が分泌する媚薬と静衣自身が垂れ流した淫蜜にまみれ、責めを受け続けるのを喜ぶかのようにぬめり膨張していた。
　もう二つの豆――真ん中を触手に穿たれた両の乳首もまた火照り充血して、苛烈な責めに晒されていた。
　白い式神は、まるで積雪した連山のように双乳へ覆い被さり、無数の触手を乳首へと這わせる。
　乳白色の微細な触手たちは、硬くしこる乳首へ取り巻くように群がり、淫核と同様に丹念に磨く。
　それに加えて、乳腺奥深くに突き刺さった触手が、グプグプと卑猥な音を立て、ねじくれながら前後運動を繰り返し、乳房へ快楽の波を送り込んでいるのだ。
　内外からの執拗な責めに、挟みつけられた乳首の神経は悦びの悲鳴を上げた。
「――っ！　つくぁっ！　あっ！　ひゃあああ――っ！　ヒクウゥうっ！　いぐぅっ！　ひぃっ、イイッ!!」
（ああ、なんて、なんて気持ちいいのぉ……息をする間も無いのに気持ちよすぎて苦しくないなんて……）
　ほとんど剥き出しといった様の快楽神経を撫でられ、達し、撫でられ、達しを繰り返す。もはや静衣の身体は、絶頂の波がおさまらないうちに次の絶頂が始まるという『イキっぱなし』の状態に陥っていた。
「はふっ、ひぅぅ、くうぅぅっ、あっ、あっ、あぁぁっ……」
「フム……反応が薄いのう……さてはこの様な責めでは生ぬるい、か」
　朦朧とした意識の中で必死に呼吸を整えようと試みる静衣に、小麻呂は冷笑を浮かべて語りかける。
「ちっ、がぁはあっ!!　はひぃっ！　くぅっ！」
（違うっ、違うのっ！　息がうまくできないから……）
　気力を振り絞って必死に否定しようとする静衣だが、自身の喘ぎ声に呑まれてほとんど意味のある言葉が出せない。
「さてさて、いかが致そうか……むうぅ、こうなっては少々痛くても構わぬかの？」
（この人……絶対分かってて言ってる！　わざと聞いてないフリをしてる！）
　小麻呂はとぼけた口調で問いかけながら、その目を嗜虐的な悦びにギラギラ輝かせる。嬉しげな口元を隠すように印を組むと、式神に指令を与えるべくボソボソと言霊を唱えた。
「那弐臥出符　礼陀佛訶　矢須狗那　壱与　娑婆訶！」
　力ある言葉に導かれて式神がその姿を変えはじめる。淫核と乳首を磨く動作は緩やかに停止し、代わりに皮膚との接触面が変形し波打ち始める。
「うぅ……うぁ……あぁ、あぁ……」
（や、やめてえっ！　これ以上無茶されたら戻れない！　頭がおかしくなって戻れないよ……怖い、怖いっ！）
　剥かれた淫核の側面にチクリという違和感が走った。ほぼ同時に、触手の侵入を許した乳房の奥からも似たような痛みが生じる。その正体が何かを考える間もなく、激痛が静衣の身体を痛烈に見舞った。
「んぎいいいいあああああああ――っ!!」
　淫核が横一文字に貫かれていた。針のように堅く鋭く変形した触手の一本が、充血した海綿状組織に突き刺さり、貫通したのだ。
　最初は目に見えるかどうかといったほどの太さだった針は、見る間に畳針ほどの太さに膨れ、周囲の細胞を押しつぶしながら神経に激痛を送り込んでゆく。
「ひい――っ、ひい――っ！　ひあぁぁ……」
　激痛のあまり弛緩した尿道からチョロチョロと黄金色の液体が漏れた。流れ出た尿は淫蜜と混ざり、式神と肌の間を埋めるように満たしてゆく。
（こんな……いくら痛いからっておしっこ漏らしちゃうなんて……どうしようどうしよう……恥ずかしいよぉ……止めなきゃ、止め……）

「んいぃっ！　い、いだいぃっ！　染みっ、いああぁっ！」

淫蜜と尿の混合物は、式神にとっては新たなご馳走だった。変形せず柔らかいままだった触手が、餌をむさぼるように啜りにかかる。

開いてしまった尿道の内壁を触手が撫で、ズルズルと下品な音を立てて舐める。体外へぶちまけられた尿は、栄養分を吸収する小腸の内壁のようにゾワゾワとうごめく触手達によって、吸い取られてゆく。

「なんと失禁しおったか！　そうかそうか、それ程までに喜ばれるとはのぅ……」

「あああぁ……そんぁ、な、舐めぇ……おしっこひぐうぅっ！」

塗りたくられる尿を追って、触手の先端は出来たばかりの淫核の傷口にまで侵入する。押し広げられた傷口に尿の塩分が染み、生まれた苦痛と快楽がまた失禁を止めようという意思を奪い去ってゆく。

（おしっこが……傷に染みて痛いのに、痛いのにすごく気持ちいい……）

愛撫によって再び激しく分泌された淫蜜が、尿と混ざって股間を覆う式神の体の端から染み出した。鼻をつく尿素の匂いと膣分泌液独特の甘酸っぱい匂いが混合し、何とも淫らな牝臭を放つ。溢れた尿は押しつぶされた柔らかな尻肉の下に流れ込み、袴の背面に失禁跡を作っていた。

「う……うぁんっ……やめ、て……な……かにぃっくぅっ……！」

表皮を流れる尿に導かれるように、式神はその姿を柔軟に変え淫唇を押し割るように這う。淫核ほどではないが、相当に敏感になった淫唇がめくり返され、膣の入口と一緒にその裏をも舐め回される。粘膜を連続的に犯される快楽によって、静衣は小さく二度三度絶頂に達する。

触手達は、絶えず痙攣して分泌液を撒き散らす牝の粘膜を浸食しながら、とうとう膣口をかっぽりとこじ開けた。そして、最も侵入を拒まれてしかるべきその箇所へ、徐々に徐々にその体を滑り込ませてゆく。

（犯される……私、犯されるんだ……きっともう我慢も抵抗も出来ないよね……子宮の奥まで掻き回されて、はしたなく声を上げて、何度も何度もイッちゃうんだ……）

静衣の背筋にゾクゾクと粟立つ震えが走る。震えを起こしているのは今や恐怖ではなく、恍惚の中にあってなお燃えくすぶる黒い期待感だった。

「んあっ……!!　……!!」

踏み込まれてはならないはずの聖域へ、無慈悲にも柔毛触手の頭が押し込まれてゆく。静衣の腹の底から広がったのは、穢されたという絶望感でもなく、異物挿入による不快感でもなく、ただただ深い深い快楽のみだった。

声を失い、笑ったような表情で顔面を硬直させたまま、静衣は一種暴力的な絶頂感を必死に受け止める。

（い、今少しでも動いたら……イクのが止まらなくなって……死ぬ！　狂い死んじゃう！　止めないと、止めっ……）

「んひいいい――っ!!　ひいぃ――っ！　ひいーっ!!」

★18 肉の隘道（あいどう）をびっちりと満たした柔毛触手がぐるりと半回転する。擬似死の感覚への恐怖でかろうじて支えられていた静衣の理性は、その一擦りによって跡形もなく消し飛んだ。

「んがあああ――っ！　ひぐぅぅっ!!　いぐっ！　イクイクうぅぅっ!!　あぁぁんっ！　アンッ！　ひっ、またあっ！　まだイクのぉっ！　きゃうんんっ!!」

膣内の触手は、まるで『豆磨き』の延長のように膣の内部を掃除してゆく。淡々としたブラッシングは愛液をこそぎ、そこへ媚薬が塗り広げられ、また新たな愛液が今度はより激しく分泌される。

繊毛は内襞（うちひだ）のシワに沿って流れ、長年の間にわたって筋状に堆積していた恥垢を剥いで、その下に隠れていた細胞へ刺激を送り込みつつ媚薬を塗り込んでゆく。

「あ――、あうぅぁあ――、あんぁぁ――っ！　いくぅぅ……ひぐ、いぐうううぅぅっ!!」

（イクッ!!　イクイクッ!!　頭の中が真っ白になって……何も考えられ……）

最奥（さいおう）への侵入を果たした触手の最先端は、柔毛を数本成長させ細かな触手と化し、子宮口を押し広げて、その場に着床するかのように吸着する。

細触手は、まるで忍者の使う鉄鉤（てっかぎ）のようにガッチリと子宮口へ食いつき、そこを支点にして静衣の全身の内臓をグラグラと揺すりもてあそぶ。

「あ――！　あーあぁ――っ！　くふぅ、うあああぁ――っ!!」

（またぁ……またイクぅぅ!!　お腹の中グチャグチャに掻き回されてイクうぅぅっ!!）

ねじれながらピストン運動する触手の先端が頸管（けいかん）を突くたびに、細触手を伝い降りていた大量の頸管粘液が泡立ち、グチュグチュと卑猥な音を撒き散らす。

数ある快楽の中で最も強力といわれる子宮口からの絶頂を絶え間なく味わわされ、静衣は全身の緩みきった腺組織から分泌物を垂れ流す。

そんな有様では尿道を締めることなど叶うはずもなく、最初の勢いこそないものの、失禁は止まろうとしない。

股間を覆う式神は、今やその体の半分を膣内に埋め、内外から静衣の女性器を思う存分しゃぶりつくしていた。

「ホホッ！　これはこれは何と凄まじき淫気じゃ！　感じる、感じるぞよ！　この『門』の向こうで彼奴が蠢（うごめ）いておる！　こっちを伺っておるぞ!!」

巨大な魔の迫る気配に興奮したか、それとも静衣の痴態に興奮したのか、小麻呂は頬を上気させて熱っぽく語る。だがその言葉すら、足元で髪を振り乱し快楽にのたうつ静衣には届かない。

「いいっ……くぅぅんっ！　イクッ！　めこイキす

蟲神楽

ぎて痺れりゅうぅぅっ!!　きゃんっ！　きゃうぅ、っくぅぅ……む、ねへぇ……」

床板をギシギシ鳴らし、何度もブリッジを繰り返して静衣は快楽に全身を踊らせる。捲れ上がった袴の下に覗く真っ白な式神は、淫核と膣内壁と子宮口の三点を同時に責め続けて、妖しくうごめきながら周期的に潮を吹くように淫蜜と尿を吐き出す。

もう一体の式神とて休んでいたわけではない。乳管の奥深くを抉り愛撫する微細な触手は、媚薬を分泌して周囲の細胞を情欲に火照らせるのみならず、経絡に働きかけて乳腺の働きを活性化させていたのだ。

それにしたがって周囲の組織は次々と母乳を作り出し、狭い乳管内の隙間を埋めていった。

乳管洞を満たしたままじりじりと前後運動する触手によって、出口を塞がれた格好になった母乳は、乳腺の中に留まり、どんどん増えて内側から乳房を圧迫し始める。元々豊かだった胸は、尋常ならぬ速度で異常なほどパンパンに腫れ上がり、式神の体に覆われたその下で悲鳴を上げた。

「うあはぁあぁ……おっぱ……おぱいあぁぁ……っ！　痛ぁ……苦し……きゃうぅぅっ!!　イイッ！　めこイクぅっ……ぐ、ぎいいぃぃ――っ!!」

(胸ぇっ！　胸が破裂しちゃう！　アソコはイッてるのに……身体がイッてるのに、おっぱいだけがどんどん苦しくなる……！)

絶頂に身体が震えると、それに連鎖するかのように乳房の底で新たな母乳が分泌される。乳房の内圧はさらに高まり、乳腺や神経の組織を引き裂かんばかりの激痛をもたらす。それは快楽に転化することすら叶わないほどの、強力で破壊的な苦痛だった。

性器から絶頂の快楽を、乳房から地獄の苦痛を同時に与えられて、静衣は半狂乱になりながら胸の式神を引きはがしにかかる。

「んっ……んぎあぁっ!!　あ――っ！　あぁ……い、痛いぃ、いだいよぉ……うぅぁ、ああ……あぁぁ、そんな、そんらぁ……またイクの……いやぁ……」

(剥がれないぃっ!!　これ……取らないと……痛いっ！　上から軽く抑えただけでこんなに痛いなんて……どうしよう、どうしたら……あ、またアソコが……アソコ責められてイッちゃいそう……だめよ！　今イッたらまたおっぱいが出ちゃう！　こたら、そうしたら……)

式神たちは無慈悲にも、静衣が性的快楽を感じ取るツボを的確に突いて彼女の神経を苛んでゆく。繊毛の生えた触手に乳管の内壁が擦られ、母乳溜まりとも言うべき乳房の中がかき回される。

乳首と淫核は真っ赤に腫れ上がってもなお『豆磨き』の刑から解放されず、子宮口から全身の内臓へと快楽の振動が伝えられる。静衣が再び絶頂に達するまでほとんど時間はかからなかった。

「イッ……クぅぅぅぁあああっ！　いだいいだいあああ――っ!!」

子宮から発した快楽の信号が静衣の体内を駆ける。それが上半身に達すると、胸の奥でまたビュクビュクといった母乳の分泌される感覚が走った。その一瞬の快楽に身を預けながら、すぐに来る激痛を予感して静衣は恐怖する。そして、絶頂を伝える嬌声は途中から悲鳴に代わった。

「と、十枝様ああっ!!　式神を、胸のコレを外してくださいいいぃっ!!　痛いぃっ!!　乳房が！　あがああああっ!!　は、ぎぃぃっ！　死ぬぅ！　しぬぅぅ！　お願い外してええぇっ!!」

開け広げた両足をバタバタと床へ叩きつけ、静衣は狂乱して必死に訴える。その様を小麻呂は見下ろし、心の底から愉快そうに話しかけた。

「苦しかろう苦しかろう！　其方の受けておる秘術は『乳封じ』と言うてのう、その昔不貞を働いた婢(★19)を拷問するときに用いられたものじゃ」

拷問、と聞いて静衣の顔がさらに青くなった。一瞬、全ての快楽も苦痛も忘れて膝立ちになり、胸を突き出す格好で小麻呂に迫る。

「ど、どうしてその様な！　拷問などと、わわ私がその様な目に……くぅぅっ、なぜ！　なぜこんな、くぁあああっ！」

苦痛に顔を歪め、切れ切れになりながら必死に抗議する。その胸に小麻呂の手が伸びた。脂ぎった白い手が、さらに白い式神の体をわしづかみにする。

「え……」

「それはのう、苦痛から解放される悦びが、快楽をより強力なものにするからじゃ」

狩衣の袖が翻る。直後、あれほど剥がそうとしても剥がれなかった胸の式神は小麻呂の手によってあっさりと静衣の胸から引き離されていた。乳腺全体に根を張っていた細触手までもが乳管を犯しながら引きずり出される。

「あっ、あっ！　あああっ!!　あ――っ!?」

(出る！　抜ける!?　外れる!!　痛いのがなくなって、おっぱいが、溜まってるのが……っ！)

内臓を引きずり出されるような異常な快感と、これから起こる解放への期待感が混ざり、静衣は潤んだ目を見開いた。

乳房の一番奥まで侵入していた触手の最先端が乳首へさしかかる。発泡酒の栓を開ける前のような静寂と緊張感が漂い、静衣は来たる次の瞬間に備えて全身の力を抜き大きく息を吸った。

――ボフウッ!!　ボフッ！

破裂音が左右の乳首から一度ずつ発する。それと同時に、触手の垂れ流した媚薬だろうか、透明な液体が泡状になって飛散した。間髪を入れず、乳房を腫れ上がらせていた正体――少量の血が混じってほんのりと赤みがかった母乳が、宙に綺麗な二本の放物線を描いて噴出する。

「おほおあぁぁぁぁあぁーっ!!　あぁぁーっ！　でりゅうっ！　お乳ぃ！　お乳出るう出るぅー！」

十二分に火照らされた乳管の内粘膜を、刮ぎ取ろう

蟲神楽

かという程の荒々しい奔流（ほんりゅう）が見舞う。純粋な物理的快感に、排出を封じられる苦痛からの解放感が重なって、静衣はたちまち激しい絶頂に達した。

「ひいっ！　あっ、きもっ、ぎもちいいいいっ！　おっぱいぃ、お乳とまらなひぃぃ～っ！　イクッ！　いぐうぅぅっ!!」

ブリュッ、ブリュッ、と下品な排泄音が響き、濃厚な母乳が噴出し続ける。のけ反り、突き出される格好になった乳房が、水圧と身体の揺れでプルプルと卑猥に跳ねる。

股間にとりついた式神は、より激しく痙攣し始めた淫裂をしゃぶり尽くすように、次々と分泌される愛液を舐め取り、さらなる愛撫を加えてゆく。淫核を串刺しにした触手が抽送を繰り返し、また別の触手が尿道をくじり、膣内を舐め、子宮口を突き上げる。

「アッ、あぁっ、あんぁっ！　またぁ、ひっ……くうぅぅっ!!」

（またイクぅ……イキすぎて頭がおかしくなる！　身体がほわほわして……軽くなって気が遠くなって……）

体重が急に軽くなって浮遊するような感覚。両乳と子宮の逆三角形の中から生み出される無限の快楽に、静衣の脳髄は芯まで溶かされてゆく。

絶頂に達し続けているゆえか、中途半端に突き出した舌が所在なさげにプルプルと震える。瞳孔は開き、血走った瞳が輝きを失ってゆく。焦点の合わない眼を見開き、静衣は常軌を逸した快楽にただ打ちのめされていた。

「い……ひぐぅぅっ！　あ――、あぁぁ――……あひゃうぅぅぁっ！　くうぅんっ！」

断続的に噴き上げる母乳の勢いを補うかのように、静衣は自らの腫れ上がった両胸を支えて搾り出す。さらなる強い快楽を求めようとする、ほとんど無意識下での行為だった。

「ホホホッ！　その様に己で乳を搾り出して……これではもう犬とは言えぬのう……そう、言うなれば……牝牛じゃ！」

（牝牛……そう、私……牝牛……それでいいんだよね？　私牝牛だからお乳いっぱい垂れ流して、気持ちよくなってもいいんだよね……？）

快楽に白く染められた脳の中に『牝牛』という言葉がすんなりと染み込んでゆく。拠り所のない無限の絶頂感の中で、それは不思議な免罪符のように効果を発揮し始め、静衣自身が快楽を求めようとする欲求の源へと成長してゆく。

ほとばしった母乳はほぼ全て、宙に佇む闇の中へまるで吸い込まれるかのように消えてゆく。その様がまた、闇の力によって母乳が搾り出されているかのような錯覚を静衣に与え、牝牛という言葉通りに乳を搾られ、惨めに玩（もてあそ）ばれる被虐の快楽を煽ってゆく。

膝立ちの姿勢で両乳を突き出し、淀み固まる闇に向かって媚びるような熱っぽい視線を投げる。顔面は赤く染まり、鼻からはまさに興奮した獣のごとき荒い息が吐き出されていた。

「ふぅぅ――！　んふぅぅーっ！　はぁーっ、はぁ――っ！」

「ホホ、感じるか？　彼奴がもうそこまで来ておるぞ！　すぐその先からこっちに触手を伸ばしておる！」

「はぁ――っ、し、搾られえー……んっ、くうんんっ！　んはぁーっ、あぁぁっ！　あああああっ!!」

興奮気味にまくしたてる小麻呂の声に反応したか、どっぷりと膣内を満たしていた触手の動きに変化が生じた。子宮底に吸着した細触手が、さらに奥の空間への窓を作るように子宮口を押し広げたのだ。間を置かず、余っていた触手達が一斉に手つかずだった子宮の中へとなだれ込む。

「んええええええ――っ!?　えぐぅっ！　お、お腹ぁあぁっ！　あ、くぅぅ……ぞ、臓腑が……ひっ、くぅぁっ！　また、いっ……くぅっ!!」

数本単位でねじれ合いながら侵入を果たした触手は、子宮内膜を網状に走り、体表の繊毛を擦りつけて膣内同様の愛撫を加える。腹の内側を直接撫でられる感覚に、空嘔吐するような悲鳴を上げた静衣だったが、それもすぐに内臓を掻き回される快感となって再認識され、またしても一段階深い悦楽をもたらした。

「あっ、あひっ！　ひぐっ、いぐぅっ！　ーっ！　んぁっ！　あ――っ！」

（またイクぅっ！　イクのがまた止まらないよぉ！　助けて……もうイキたくないよぉ……）

口をついて出る意味のない喘ぎ声すら切れ切れになってゆく。気を遣り続けるその眼球はほとんど白目に裏返り、『門』に向けて構えられた乳頭からは断続的に搾り残した母乳が噴き出す。静衣は一呼吸ごとに短い失神を繰り返し続けていた。

変化は突然訪れた。

「あぅ……んぁ……――!?」

溶けかかった思考回路に、一片の冷たい感覚が流れ込んでくる。火照った脳髄を一気に醒ます、異常な不安感を植え付けられるような感覚だ。

「むっ……」

続いて、気温が急に下がった。それだけではない。周囲の空気は明らかに変質をきたしていた。

直後、『門』から一斉に冷たい風が吹き抜け、静衣と小麻呂の背筋を凍らせる。それは単に温度が低いだけではなく、巨大な重圧感を持った、浴びるものに恐怖感を強制するような風だった。

「来おったか……！」

小麻呂の表情から笑みが消えた。余裕のあった笑みは引きつり、額には冷汗を浮かべている。静衣もまた、圧倒的な威圧感の前に声を上げることすらままならず、ただ尻餅をついて小さく震えるのみだった。

部屋の空気と『門』との境界線がぐらりと揺れ、闇の中から黒々とした闇をまとった肉塊が姿を現す。

肥満体の人間に似た丸い身体、その色は生皮を剥いだような肉色で、腕にあたる部分は左右とも十本近く

の触手に枝分かれしている。文献にあった『管魔』そのものの姿だった。

管魔は悠然と『門』を越え、床へ足を下ろす。鋭い風音と同時に、紙垂は全て吹き飛び、注連縄は無惨に千切れ飛んだ。そして、静衣を極限状態にまで苛んでいた式神もまた巨大な陰気にあてられ、ジュッという音とともに巨大な熱量を発して蒸発し、あっけなく消滅した。

「きゃあああああ――っ!!」

局部を焼かれる激痛に静衣は絶叫した。

＊

「静衣さま……!?」

悲鳴は別室で待つ紗雪たちの元にまで届いていた。反応したのは紗雪一人だ。小麻呂の連れてきた従者は二人とも畳に伏して眠っている。特製の苦蓬茶（★20にがよもぎ）をもてなしに振る舞った成果だ。

「やっぱりあの男……」

髪をかき上げて紗雪は忌々（いまいま）しげに顔を歪めると、声のした方――祓所へ向かって走っていった。

＊

静衣は尻餅をついたまま動けないでいた。ついさっきまで脳髄を支配していた淫猥な感情は、激痛と一緒に吹き飛び、身動きすることすら許さない圧倒的な恐怖に取って代わられていた。

それをあざ笑うかのように、管魔は両腕をかざし、十数本に及ぶ触手を宙に展開した。

「ひ……」

「う、うむ……しばし待たれい……」

恐怖で固まった口をやっとの思いで開き、目配せする。だが、小麻呂は動こうとしない。彼もまた強烈な威圧感の前に動けないでいるのだ。

困惑と恐怖に、静衣が床を後ずさりし始めたその時だった。

「静衣さまっ!!」

入口の戸が乱暴に開く。間を置かず、切迫した悲鳴のような声を上げて紗雪が飛び込んできた。

「紗雪……?」

「こ、こら……待っておれと言ったのに……また話がややこしく……」

一瞬、管魔から押し寄せる恐怖感すら忘れて二人は紗雪の方へ向き直る。

「静衣さま……? 何を……しているんですか……何故そのようなはしたない……」

「いやあっ! 紗雪っ、見ないでぇっ……じゃなくて来ちゃだめ! 危ないのっ!」

胸をはだけ、濡れた装束に身を包んだ静衣。印を組んで固まったままの小麻呂。そして凶悪な魔の気配を放つ怪物。三者の関係を把握しきらないまま、紗雪はとりあえず静衣に駆け寄った。

「な、な、何を……十枝様!? まさか……魔物を呼び出して……!」

「ち、違うのよ紗雪……これは……」

「許せない! あたしの静衣さまになんてこと……」

「危ないっ!!」

紗雪の背後から迫る触手を見て、静衣は慌てて大声を上げる。その警告が功を奏する間もなく、管魔の触手は紗雪の胴を捕らえていた。

「きゃあああっ!」

「紗雪っ!!」

一本、また一本と細腰に巻き付いてくる触手によって、紗雪の身体は徐々に持ち上げられてゆく。

「なに……何よ……この気持ち悪いの……は、剥がれないっ!」

困惑と不快感に顔をしかめ、触手から逃れようと足をばたつかせる。管魔にとっては児戯（じぎ）に等しいものなのだろう。抵抗は全く功を奏することなく、紗雪の身体は軽々と宙に浮かび上がった。

「十枝様! お願いです、紗雪を助けて下さい! 早くしないと連れて行かれちゃう……きゃあああっ!!」

涙ながらに小麻呂に訴えかけていた静衣だったが、宙に留まっていた触手によって彼女自身もまた捕らえられてしまう。

「十枝……様っ……」

腹が圧迫される苦痛に耐えながら、静衣はすがるような視線を小麻呂に向けた。

「うむ、そのことじゃが……管魔は狭きとはいえ一つの世界を統べる魔神。対して儂は、陰陽師とは申せ一介の人間じゃ。単純に考えて、儂が戦いを挑むのは無謀としか思えぬ」

「え……?」

脂汗を拭いながら小麻呂は続ける。

「いやいや、儂とて何の考えもなしに魔物を呼び出したりはせぬぞよ。先ほども申したように彼奴の目的は淫気（いんき）。さらに言えばその主たる女性（にょしょう）じゃ。それ以外のモノには目もくれぬと聞いていたが、どうやらその通りのようじゃの」

「そ、それって……」

「平たく申せば、生贄になってもらおう、ということじゃな」

震えていた口元が徐々に余裕ある様へと変わってゆく。自分の身が、緊張した戦いの場にはなく、安全な傍観者の立場にあったことを再認識した安堵感ゆえだった。

「このおっ! は、離しなさいっ! うっ……!」

「紗雪っ!」

必死に逃れようとする紗雪だったが、みぞおちに触手による強烈な圧迫を受けてあっさりと気を失ってしまう。まるで暴れる家畜を黙らせるような、そんな所作だ。

「やはり……騙（だま）したのですね……」

「ホホホホッ、騙したと言えば人聞きが悪いのう。方

蟲神楽

便を用いた、とでも言ってもらいたいものじゃ。其方たちが『狭間』で淫気を捧げ続けることによって、管魔は飢えることがなくなり、現世への干渉もなくなる。其方たちはこの世を救うのじゃぞ？　光栄とは思わぬか？」

　小麻呂の説明が熱を帯び始める。甲高い笑い声も戻ってきた。

「で、でもっ……それじゃあ、神社が……」

　自分が居なくなってしまうと神社の存続が危うくなるのだ。これでは、今まで苦しい日々に耐えてきたのが無駄になってしまう。静衣の心配は自分の身から神社の方へと移っていた。

「案ずることはないぞよ。儂の娘婿（むすめむこ）は其方の親戚筋に当たる者でのう、これがまた腕の良い神職なのじゃ。その者が跡を継ぐゆえ、六車の家は滅びぬ。荘園も半分はそのまま残り、もう半分も名の知れた武家の者が庇護（ひご）するゆえ、こちらも安心じゃ」

「まさか……最初からそのつもりで……」

「ホホッ、ここまで言うとさすがに分かるかの。何しろ儂のように、大した土地も社も持たぬ貴族は都でも肩身が狭くてのう……ああ、ついでに申すと、其方の父に魔物が憑くように呪いをかけたのはのう……あれは儂の仕業じゃ」

「え……!?」

　あまりに軽い口調で言い放つ小麻呂を見つめ返して、静衣は間の抜けた声を上げた。一瞬遅れて、その両眼が驚きに見開かれる。

（そ、それじゃあ私は……この人に操られて踊っていただけ……いや、そんなことより、コイツが！　この男が父さまを……!!）

「こっ……のぉっ!!」

　ジタバタと藻掻く静衣を直視しないようにして、小麻呂は淡々と続ける。

「まあ気の毒じゃが、遅かれ早かれここも無法者の武士に切り取られる運命だったのじゃ。そうなる前に手を打ったまでのこと……おっと、そろそろ別れ時のようじゃの」

　いつの間にか、静衣の身体は『門』のすぐ側まで引き寄せられていた。管魔の身体は既にその向こうに消え、闇から伸びる触手が静衣と紗雪の身体を捕らえている状態だ。

「ひっ、ひあっ！」

（引きずり込まれる！）

　片足が『門』の中へ引き込まれる。ぬかるみに突っ込むような触感、そして闇に埋もれた先の皮膚感覚が失われる不快感に、静衣の恐怖心が再び沸き起こる。

「わ、私を……どうしようと……」

「はて……これは最早（もはや）、儂がどうこうする問題ではないからのう……何せ、これまで管魔にさらわれて生きて帰った者はおらぬのじゃ。まあ、我が式神の手によるものなど比べものにならぬほどの猛烈な快楽を与えられ、淫気を搾り取られることになるじゃろうな」

「そ、そんな……」

　無慈悲な闇の中へ、徐々に身体が飲まれてゆく。そして、弱々しい悲鳴を最後に、静衣の姿は完全に『門』の向こうへと消え去った。続いて、気を失ったままの紗雪と、余って宙に待機していた触手達も後を追う。

　全てが向こう側へと去った後、世界の境界面たる闇の塊は急速に小さくしぼみ、消え失せた。後には何事もなかったかのように、湿っぽい夏の空気がどんよりと溜まっているのみだった。

「ふぅ……許せよ……これが最善だったのじゃ……魔を遠ざけ、なおかつ社を守る、唯一の……」

　今やただの空気しか残さない空間に脱力した視線を這わせ、小麻呂は虚ろな口調でつぶやく。沈みかけた陽の光が窓から差し込んで、部屋を赤く照らしていた。

*

　意識と一緒に全身の感覚が戻ってくる。

　一度バラバラにされた精神と肉体が、少しずつ組み合わされてゆくようなもどかしい感覚を経て、記憶と思考力がようやく取り戻されてきた。

（随分薄暗い……ここが『狭間』なの……？）

「う……えぅ……」

　周囲を見渡すべく首をひねるが、動けない。何か強い力で押さえつけられているようだ。口をついて出た呻きは呂律が回っていない。

（頭が重い……それに身体も……動かせない……？）

　口の痺れが薄れ、手足の感覚が戻ってくる。ここに至ってようやく、静衣は自分が四つんばいの姿勢を取らされていることに気がついた。

　腹に巻き付いた触手が腰を持ち上げ、ふくらはぎを何重にも締め付ける触手が両足を床に縛りつける。両耳を塞ぐように貼り付いた触手が乱れがちな髪をまとめ、同時に頭をがっちりと固定する。

　いずれの触手も血の通った腸管のような薄桃色で、蒟蒻（こんにゃく）のように柔らかな弾力を備えている。ソイツらが、上衣も袴もはぎ取られて一糸まとわぬ姿の静衣に群がり、きめ細やかな白い皮膚の表面にぎっちりと吸着していた。

（紗雪は……いない、か……）

　目を凝らして暗い空間の奥を探すも、紗雪の姿は見えない。代わりに視界をほぼ占有するのは、静衣を拘束する触手と同じ薄桃色の肉壁だ。いや、壁だけではない。床も天井も内臓壁を思わせる柔らかな触手の集合体で覆われ、数間四方の狭い空間に静衣を閉じこめる。触手の海は捕らえた獲物をあざ笑うかのようにゆるゆると蠢（うごめ）き、甘酸っぱく淫猥な臭気を放っていた。

（まるで繋がれた家畜ね……）

　自分の境遇を自嘲するかのように静衣はうなだれ、直後にびくりと震え上がる。『家畜』という単語が頭をかすめたことによって、全身の細胞が飛び起きるように賦活（ふかつ）させられたのだ。首筋から背筋を駆け下りるようにゾクゾクとした感覚が走り、植え付けられた被

虐快楽の記憶を呼び起こす。
「あ……んぁ……」
興奮に震え始める静衣の皮膚は、ただ拘束のためにあったはずの触手と触れ合い、そこからじんわりとした穏やかな快楽を生み出してゆく。
顔面が紅潮し、鼻腔が膨らんで、荒い鼻息とともに甘い喘ぎが漏れる。異常発達した乳腺は反射的に母乳を作り出し、責めに備えるように乳首を硬く尖らせる。小麻呂の式神によって飼い慣らされた肉体は、今や完全に責められ態勢へと突入していた。
(う、そぉ……身体が勝手に……反応してる!?)
自らの身に起こった生理的反応に戸惑い、静衣は四つんばいに拘束されたまま身を固くする。そのささやかな抵抗を軽く打ち砕くように、両耳の孔が肉厚の触手によってズルリと舐められた。
「ひぅっ!? んくっ、んあぁぁ――っ!!」
低刺激状態のまま、ただ火照りのみを蓄積させられていた皮膚に、突如としてむず痒い快感がもたらされる。平静を取り戻す暇を与えないうちに、舌のようにざらついた表面を持つ触手は淫液を伴い、★耳朶から耳裏、首筋を這い、背筋を撫で降りてゆく。
「アッ、アアァッ! あはあぁんっ!!」
管状の触手から惜しみなく吐き出され、塗りたくられている液体は、小麻呂が使った式神のものよりはるかに強力な催淫薬だ。皮膚から急速に吸収されたその成分は、即座に脊髄を冒し、一瞬で静衣の全身を非日常的な快楽の極致へ導いた。
絶頂に伴って乳腺から乳首の組織に母乳が浸潤し、搾られるのを待つように乳房が張りつめる。痙攣する膣では淫蜜が生み出され、勃起した淫核を洗うように潮となって噴き出した。
「んはぁ――、はぁ――、はぁぁ……」
(何よぉ……今の……撫でられただけでイッちゃった……これ、ダメぇ……こんなの絶対抵抗できない……)
抵抗不能な快感に打ちのめされ、静衣は自らの家畜性を強く再認識させられる。心の内では、家畜として母乳と淫気を搾り取られるだけの存在に堕ちたい、という思いが徐々に支配的になりつつあった。
「え、あぅ?」
弾力豊かな触手が頬を撫で回し始める。塗りたくられた液体から染み入る、痺れるような快感が、緩んだ顔面の筋肉をますます弛緩させる。触手は頬を這い、半開きになった口の中へするりと滑り込んだ。
「ふむっ!? えぅ、うぇ?」
(し、舌に巻き付いて……舌が……吸い込まれる!?)
侵入したパイプ状の触手は、口腔内に負の圧力をかけて静衣の舌を己の内部へと引っ張り出す。そして舌を包み込む形のまま、ゆっくりと押し進んできた。
隙間を作るまいと口腔を埋める柔らかい組織が、頬の内側の粘膜を擦り、舐め、撫でる。強制的に突き出す格好にされた舌も、全方向から覆い被さる肉管の内壁によって愛撫されていた。
肉管から惜しみなく送り込まれる分泌液は、口内を余すことなく満たし喉まで到達する。媚薬成分が、皮膚よりもさらに吸収率の良い粘膜を通して周囲の血管に入り込んでゆく。特に、最も新鮮な原液に浸される舌先は、異物を吸収するショックに、それ自体が絶頂を感じ取る性器のようにピクピクとせわしなく痙攣し続けていた。
「おぅ……むぅぅ……ふむうぅぅっ……!」
(甘ったるい液体が染み込んできて……頭が、ぼーっと……口の中犯されて……イクッ! 喉でイクゥッ! イクゥッ!!)
吸収された媚薬は脳関門を強引にこじ開け、即物的な快楽で静衣の脳髄を支配する。全身の表皮と粘膜が性器と化し、口腔と喉から走り始めた悦楽を伝達する。今や、口蓋垂を転がされる吐き気すら、変質をきたした静衣の身体には胃の腑をえぐるような快楽として認識されていた。
「むぅぅぅ――、ふむうぅ、む……ぐむぅ……」
(くぅ……イッ……クウゥッ! あぁ、脳みそイッてるのにぃ……おっぱいが張って苦しいぃ……)
粘膜の一片一片が擦られ、味蕾の一つ一つが犯される度に、静衣は快楽に身体を震わせる。それに反応して乳腺は次々と母乳を分泌し、張りつめた乳房をさらに内圧をかける、ジクジクと乳首からわずかに漏れ出る。
「んんぅ……んむぅぐうぅぅ――っ! むーっ! ふむうぅぅっ!」
(こんなのぉ、こんなのおかしいよぉっ! 気持ちいいのに、何度もイッてるのにぃ! 苦し……くぅ、お乳ぃ、お乳搾って欲しいよぉっ!)
本来性感と関係ない場所から強制的に与えられる絶頂感と、敏感に改造された性器や乳首が放置される焦燥感のギャップに、静衣は四つんばいに縛られたまま狂ったように暴れ、腰を振りたくる。メロン大に肥大した両の乳房が卑猥に揺れて互いにぶつかり合い、乳首の先からわずかに漏れ出る乳汁が、肉色の床へ蒔かれて吸い込まれてゆく。
それはまさに、厩舎に繋がれて暴れながら体液を垂れ流す家畜といった風情であった。熔けかけた思考の中で己の惨めな有様を認識し、静衣は被虐に弄ばれる快楽に酔いしれる。取り返しのつかない肉体に堕とされてなお、倒錯した快楽に浸ろうとする自分がまた惨めに思えて、被虐心が煽られてゆく。被虐嗜好を土台にした無限快楽思考の中で、静衣は気の遠くなる程の絶頂を何度も何度も繰り返していた。
「う……あぁ……」
突如、音もなく両膝の間の床が盛り上がり始めた。隆起は瘤となり、やがて細く長く成長して、口腔を犯すものと同じ管状の触手に成長する。太腿を伝い落ちる淫蜜を舐めるように、触手は静衣の脚を這い上がってゆく。敏感な性感帯と化していた内腿の筋肉は快楽に痙攣し、掻き回されるのを待ちわびていた淫裂は期

蟲神楽

待感に濡れそぼる。
「んっ、むぅぅ――、ふむぅ……んっ、くぅぅっ！」
（あ、あぁぁ……脚ぃ……脚舐める触手が……お、犯してくれる！　やっと犯してもらえるぅ！　脳が壊れちゃうぐらい気持ちいいのが来る！　来るよぉ……！）
陰毛を軽くかすめただけで静衣は絶頂に達し、勢いよく潮を噴く。触手はそのほとばしりを浴びながら、無防備に肥大した淫核も期待に震える淫唇も素通りして、これまで手つかずだった排泄器官へと貼り付いた。
「むぅっ!?　ふぅぅ……んぐぅぅぅぅ――っ!!」
（嘘っ!?　お尻……ダメっ！　そこ違うぅっ！　いやぁ、お尻の穴にくるぅっ!!）
抵抗する間もなく、繊毛を帯びた触手管が直腸へ滑り込む。本来、菊門を堅く守るはずの括約筋は、全身の神経を寸断する快楽の影響でほとんど機能していなかった。
触手管がうねり、ゴポゴポと泡音を発して液体を送り出す。直腸に何とも言えないひんやりとした感覚が広がり、流し込まれた催淫薬はすぐさま腸壁へと吸収される。成分によって過熱する周囲の細胞が冷たい感触をうち消し、腸内をも性感帯へと変えてゆく。
「ん……んふぅ……んー……むぅぅ……ふ、むぅぅんっ！」
（あぁ、とうとうお尻の穴まで……こんな不浄の穴まで穿られて私は……私はぁっ……またイクゥッ！）
頭や尻と一緒に、繋がれた触手をガクガク揺らしながら、静衣はさらに深く高い悦楽の極みに達する。溜まった乳による胸の圧迫や、放置された膣奥の疼きも、融けるような至福感の中に全て埋もれていた。
違和感はその数瞬後に訪れた。
「んむぅ!?　ふうんん――っ!!　ん――っ！　んんん――っ!!」
（……!?　な、何っ!?　今お尻の中に粒みたいのが……いやっ、また来たっ！　またぁっ！　ひいいっ!!　中で動いてる！　歩いてる!?　這ってる!?）
流し込まれている固体は、体長二～三寸の『蟲』であった。
薄桃色のナマコの体表に細かい触手がびっしりと生えたような、異形の環形動物。それが催淫薬と一緒になって、静衣の直腸へと大量に浣腸されているのだ。
敏感な腸壁を存分に愛撫しながら、蟲たちは腸の奥へと進んでゆく。
腸壁のシワに沿うように這い、筋状に付着した排泄物のカスを舐め取って、代わりに丹念に催淫薬を擦り込む。
「ひうぅ……うえぅむぅぅ――っ！　えぅぅ……」
（お尻の中がっ！　あ、洗われてる!?　擦られて、きれいにされて、気持ちいいトコロが増えていく！　またイクゥッ！）
吸い出されたまま攣りそうになっている舌をヒクヒク痙攣させつつ、静衣は腸を蟲に這われる快感に涙を流す。性感帯と化す範囲が身体の奥へ拡大する度に、次々と新鮮な快楽が送り込まれ、静衣は絶頂感のみならず肉体を開発される悦びにも浸ることが出来た。
蟲たちはS字結腸を越え、下行結腸にまで侵入する。目標は腸壁にべっとりと付着した宿便だ。薬液をたっぷりと帯びた蟲たちは、各々が思い思いに大腸の中を舐め歩き、宿便を分解しては、腸壁へ催淫薬を擦り込んでゆく。
薬液の中に浮かぶ糞便も徐々に分解され、腸の中を満たすものは有機的な汚濁から無機的な清水へと変化してゆく。生物としての営みを一つ一つ打ち砕き、単なる快楽発生のための装置に生まれ変わらせる、そんな過程を思わせた。
「おむぅぅ……ぐぅ、ん……むぅぅぅっ!?」
（吸い……取られるっ!?　お腹の中が……出ちゃう!?　ダメ、止められない!!）
蟲や液を流し込む一方だった触手管が、今度は逆に吸引を始めた。これまで上方へ押し曲げられていた腸壁の襞は、逆流する薬液と蟲によってゴリゴリと刮がれ、摩擦による快楽を生み出す。浣腸による圧迫から解放される感覚が重なって、静衣はまた異なった種類の喜悦に脳髄を溶かされた。
「むーっ、んむぅぅ――……」
（はあぁぁぁ……お腹掃除されるのがこんなにイイなんて……特に最後の吸い取られるの、腰骨が引き抜かれて魂まで吸われちゃうそうだった……）
半開きの眼で宙を見つめ、静衣は絶頂の余韻に浸る。三度ほど呼吸を整えたところで、再び触手管がうねり始めた。たった今吸い取られた腸の内容物がそのまま送り返されて来たのだ。
「んぐっ!?　むぅぅっ！　むぐぅぅ――っ!!」
（あ、あぁぁ……また、また来たぁ……お腹がギュンギュン張ってきて……蟲ぃ！　蟲ぁ……蟲がお腹の中舐めるぅぅっ！　気持ちいい、気持ちいいよぉ……イクイクゥッ!!）
半開きだった眼を見開いて、虚空に焦点を合わせる。浣腸された腸の中を蟲に犯され、糞便を掃除される快感に、静衣は再び激しい絶頂に晒された。
（あぁぁ……と、ということは……またやっぱり……やっぱりぃ！）
静衣の予感したとおり、程なくして再び吸引が始まる。宿便がほとんど掃除されたことによって、蟲と腸壁がより直接的に触れ合い、清涼感と言っても差し支えないほどの純粋な快感が生み出されてゆく。そして全てが吸い取られたとき、静衣の意識は快楽のあまり数瞬の間途切れ途切れに失われるまでの状態に陥っていた。
「んむぅ……むくぅ……くんぅ……」
（これ、ダメ……こんなんじゃ私、もう絶対に戻れない……元の身体になんて絶対に戻るの無理……やっぱりここで家畜みたいに生きるしか……）
口腔を満たす触手を乳飲み子のようにしゃぶり、快

楽の補助剤を補給する。細長く続く絶頂のような至福感の中で、静衣は自らが飼い慣らされるのを呆然と感じ取っていた。

そして再び触手がうねる。三度目の注入が始まろうとしていた。

「むぐぅ……ふぶぅ……ん……」

(ダメ……ダメよぉ……こんなのもう一回やられたら、壊れるぅ……死んじゃう……)

精神崩壊の危機を感じ取り、静衣は必死に抵抗の意思を作り出す。しかし、口をついて出るのは弱々しい呻きだけ。身体の方はもはやほとんど反射的に快楽を求める装置と化して、超自然的な快感をもたらしてくれる蟲浣腸を待ちわびて全身を火照らせるといった有様だ。

薬液が直腸を満たすと、蟲たちはまるで住み慣れた巣へと帰るように腸壁へ群がる。時間をかけて浸透した催淫薬の成果か、さらに洗練された純粋な快感が腸壁の細胞から生み出される。下腹部を覆う快楽はすぐさま全身に伝わり、貧弱な抵抗の意思を一瞬にして消し飛ばしてしまった。

「ふぅーっ、むぐぅーっ、むぅぅーっ……」

(お腹ぁ……お腹が張るぅ……は、早く吸い取って欲しいよぉ……あの気持ちいいのぉ、吸引して、吸い取っ……!?)

下行結腸までたっぷりと蟲と薬液を浣腸され、静衣は快感と吸引されることへの期待感に身を任せて、全身の筋肉を弛緩させる。そこへ不意打ちが起こった。

――キュポンッ

一種コミカルな音を立てて口と肛門から同時に触手が引き抜かれる。当然動かないと思っていた栓がいきなり外されたのだ。内圧を押しとどめる力は、静衣の括約筋には残されていなかった。

「ひあああああああああああ――っ!! あ――っ! あああぁ――っ!! あひあぁっ! むひぃっ! 蟲ひいぃっ!! おひりひぐぅぅっ!!」

(あ、あひぃ! イクッ! お腹蟲が下ってくのイクゥッ!! なんで? どぉしてぇ!? お腹の中ぶちまけるの止まらなくてイクッ! またイクゥッ!! 蟲がお尻の穴でプリュプリュして……あぁぁ、私ぃ、お尻から蟲を漏らして、垂れ流して、気持ちよくて止まらないよぉ――っ!!)

ボボボボッといった擬音を伴って、静衣の肛門が『爆発』する。散々に腸内を犯してきた蟲たちは流れに乗って菊門を通過し、腿や脚や床に次々と撒き散らされる。蟲の愛撫と、排泄の快楽と、垂れ流し行為の惨めさが煽る被虐感が三重に重なり、静衣は何度も何度も深い絶頂をその脳に刻み込まれる。糞便の悪臭は全て分解されていたためか全く無く、周囲には薬液の甘い香りだけが漂っていた。

快楽以外全ての感覚が薄れてゆく中、搾り出すことを許されない乳房の膨圧感だけが、現実臭い不快感として脳裏の隅に引っかかっていた。

「あ……はああぁ……はあああぁ……」

口腔を解放されてなお、痺れた舌を犬のように突き出して、静衣は延々と続く終わりのない悦楽を堪能する。

「む……蟲ぃ……蟲ゾワゾワいって……あ、あっ、あぁ……」

噴出した百匹近くにも及ぶ蟲は快楽に震える柔肌を這い、まるで自らの巣に帰るかのように菊門目指して寄り集まる。だが、眼も触覚もない単純な生物ゆえだろうか、そのうち半数以上は直腸の中へ戻ることが出来ず、そのすぐ脇で物欲しげに涎を垂れる淫裂の中へ飲み込まれていった。

「えっ……い、いやあああぁ! アンッ! アッ、アアァ――ッ!! む、蟲がぁ……おぉ、めこの中ぁ! 入る入る入るぅぅっ!! ひきゃうぅぅーっ!!」

(い、いっぱい……ギシギシになるまでアソコに蟲が詰め込まれて……いやっ! だめぇ! 同時になんてそんなぁ……)

余韻に浸るような絶頂感は、焦らしに焦らされた性器への本格的な責めによって、暴力的とも言える激しい絶頂感に取って代わられる。

休みなく分泌される膣液に溺れながら、蟲たちは互いに身を寄せ合い、火照り爛れた粘膜をのたくるように犯す。淫核に穿たれた穴へ潜り、押し広げるように行き来する者、尿道口をくすぐり押し広げて膀胱へ侵入しようとする者、そして子宮口を押し割って子宮の内部にまでなだれ込もうとする者。

「ほおぉぉっ! いぐイクイクゥッ! めこいくぅっ! 蟲いっぱいしゅごいのぉっ! あ――っ! ひぐふぅぅ――っ!!」

子宮を中心にしたいくつもの性感帯の上で、蟲たちが一動作するごとに、蟲と尿道の隙間からは断続的に尿が漏れ、膣を埋める者たちの間からは潮が噴き、喉奥からは獣じみた絶叫がほとばしる。

一方、両乳房の奥では身体が絶頂に達した回数に応じて、忠実に母乳が生産され続けていた。乳首から滲出する乳汁が雫となってボタボタと垂れ流されるものの、いかんせん排出が生産に追いついていない状態だ。中に母乳を溜め込んでパンパンに張った乳房は、内圧によって今やどす黒いほどに充血していた。

(苦しい! 搾り出したい……! でも……これで搾って欲しいなんて言ったら……この上お乳まで気持ちよくなっちゃったら……)

自我の吹き飛んだ向こう側の世界から帰って来られなくなるかもしれない。そんな不安に駆られて静衣は逡巡する。だが、迷ったのはほんの一瞬だった。

「し、搾ってえぇぇーっ!! お乳張って苦しいのおぉっ! びゅるびゅる白いお乳出したい! 出したい出したい出したいぃっ!!」

「じゃあ、あたしが搾ってあげますね!」

声は意外に近くから聞こえた。

「ふぇ? 紗雪……?」

四つんばいのまま顔だけ起こして正面を向く。目の

前に立つのは確かに紗雪だった。小柄な身体も、左右に短く結った髪も、少し大きめの巫女装束も、今朝方までの紗雪と同じものだ。

しかし、静衣が戸惑い呆然としてしまうほどに、紗雪は変わり果てていた。優しいながらも芯の強さを秘めていた眼差しは、目尻の垂れ下がった薄笑いに変わり、顔つきからにじみ出る自律性が完全に失われていた。

そして何より決定的だったのが、下腹部を覆う袴の異様な盛り上がりだ。外から見ても明らかに異常と分かるほどに突き上げられ、先端にはじっとりとシミが広がっていた。

「紗雪……なに……それ……」

紗雪はその盛り上がりを、袴の上から両手で愛おしげに包み込む。なぞるように布地を押しつけると、内部で屹立する棒状の器官が浮かび上がった。

「えへへぇ、分かりますぅ？『静衣さまのこと犯したい！』って思ってたら生えてきたんです」

「や、やっぱり……それって……」

紗雪はどこか頭の線が一本切れてしまったような、舌足らずの口調で話し始める。静衣の想像通りそれは、紗雪が本来持ち得ないはずの男性器だった。想像の範囲を超えていたのは、それが軽く一尺を越える長さを持つ巨大なものだったということだ。

「うふふ、あはは、はぁんっ……このオチンチン、すっごく気持ちいいんですよぉ……もうさっきから何度も何度もイッちゃって、袴の中ベトベトなんですぅ。静衣さまの香りが染みついた装束の匂い嗅いで、静衣さまの香りが染みついた袴にオチンチン擦りつけて……あはぁ、幸せ、幸せぇ……イクイクウゥッ！」

喘ぎ善がる言葉はもはや、誰に聞かせるでもないものになっていた。袴越しに輪郭を現す野太い肉棒を、一心不乱に両手でしごき続ける。そして虚ろな眼を宙に這わせたまま全身を硬直させると、袴の裏地へ濃白色の液体をぶちまけた。鮮やかな紫色に広がったシミがさらにその範囲を広げる。生臭い牡の匂いが辺りに漂った。

「いや……嘘よぉ……紗雪まで、そんな……」

「はあぁ、はあぁぁ……出しても出してもガチガチの勃起が治まらないのぉ……」

あまりの惨状に呆然とする静衣のもとへ、紗雪はゆっくりとにじり寄る。放出してなお萎えることない勃起は、腫れ物のようにジワジワと紗雪の精神を蝕み続けていた。

「うふ……ねえ静衣さまぁ、静衣さまはおっぱい搾って欲しいんですよねぇ？　あたしのオチンチン舐めてくれたら、いーっぱい搾ってあげますよぉ？　思いっきり、ぎゅーって牝牛さんのお乳搾るみたいに……何度も何度も数え切れないぐらいイッちゃって、もう搾られるのイヤって言っても、お乳が枯れるまで延々搾り続けてあげます。あぁ、想像しただけでもう……もう最高おっ！」

「うっ……」

濡れた袴の盛り上がりを鼻先に突きつけられ、軽くむせかえる。鼻腔に広がった先走り汁の匂いが原因だ。たがそれは同時に、静衣の身体に本能レベルで植え付けられた牝としての欲求を強烈に呼び覚ますものでもあった。

「うぁ……な、なん……んっ！」

静衣は急速に熱くなり始めた自分の身体に戸惑いの声を上げる。制御不能なその火照りは、たちまちのうちに心地よい快楽となって、軽い絶頂をもたらした。痙攣する膣口から蟲たちが溢れ、淫蜜の糸を引きながら肉色の床にこぼれ落ちた。

「うわぁ凄い！　蟲ですか……」

「いやっ！　見ないでえっ！　ほんとは違うの！　こんなの私じゃない……」

「何言ってるんですか。そりゃあ見た目はえげつない光景ですけど、この蟲たちは静衣さまが心の底で望んだからこそ現れたんですよ？」

「そんな！　そんなこと私……」

半べそをかいて反論しようとする静衣を、紗雪は勝ち誇った眼で見下ろす。

「あたし、分かったんです。この子達は敵なんかじゃない。あたし達が一番気持ちいい思いを出来るように、手助けして願いを叶えてくれるんですよ。静衣さまを犯したいって妄想のおかげであたしはオチンチンを手に入れたし、そのおかげでこうやって静衣さまの所まで導かれてきたんです！」

紗雪の言うことはもっともだ。管魔が静衣たちの淫気を糧にする以上、最も上質で最も長く供給されるものを彼は望むだろう。だとすると、獲物となった個体が最大限の快楽を受け取れるように、心の奥底に隠れた強い性的欲求を掘り起こそうというのも頷ける。

「うそよ……うそよそんなそれじゃあ……」

（そうよ、そんなの認められるわけないじゃない！　だって……）

「嘘だと思うなら実践してみましょう……おいで！」

紗雪は宙に右手をかざす。それに合わせて、触手の集合体のような天井から、スルスルと二本の細い触手が降りてきた。

「んがっ!?　んあ、んいいぃ!?」

二本の触手はそのまま静衣の両鼻に入り込み、鉤状に曲げた先端で鼻の穴を引っかけ、上方へ引っ張り上げる。漂う牡臭に伏し気味だった顔面が無理矢理起こされ、鼻は豚のそれのように扁平に潰れて穴をさらした。

「どうです？　これはあたしが『静衣さまの可愛いお顔が、無理矢理歪められるのを見たい』って強く願ったから現実になったんです。それにしてもそのお顔……静衣さまのこんなお顔が見られるなんて……もうそれだけでイッちゃいそぉ……」

紗雪は陶然としながら、カチカチに張りつめた肉棒を袴越しのまま静衣の鼻先へさらに強く押しつける。

「んむんっ!?　んくっ、んあぁ……」

蟲神楽

（どうして？　この匂い嗅いでると……また、身体が、アソコが熱く……）

誘引剤に惹かれる虫のように、静衣は突きつけられた肉塊をくわえ込んでいた。

ざらりとした、良く知った布の感触に染み込んだ牡の匂い。そして布越しに伝わってくる熱い鼓動と肉の痙攣。全てが静衣の感情を狂わせようとしていた。

牡槍にむしゃぶりつく静衣は、ちゅうちゅうと音を立てて袴に染み込んだ精液までも舐め取ってゆく。紗雪の袴は牡槍ごと静衣の口腔へ吸い込まれ、口内粘膜と亀頭との間で心地よい摩擦を生み出す存在へと変わっていた。

「んあぁ……こ、こうして静衣さまにご奉仕してもらうのが私の夢だったんです……静衣さま……本当に豚みたいで醜くて滑稽で、素敵ぃ……」

（豚……豚、豚……私家畜の豚……オチンチンにむしゃぶりつく家畜の豚あぁーっ！）

「んちゅっ、むぐぅ……んぇ……ふむうううっ!!」

喉近くまで届く牡槍を必死にしゃぶり、静衣は家畜に堕とされた身を演じる。被虐と自失の入り交じった何とも言えない充足感が全身を支配し、静衣はいつの間にか連続絶頂の波にさらわれていた。

「あははっ、静衣さまイッちゃったんですかぁ？　豚鼻にされて、豚って罵られて、喉犯されただけで……そぉんなに、気持ちよさそぉに……」

一方の紗雪も徐々に呂律が怪しくなってくる。静衣を言葉責めにしながら、その嗜虐的な快楽によって紗雪自身までが悦楽に弄ばれていたのだ。くわえ込まれた敏感な新造器官は、ざらついた袴の繊維の間で転がし擦られ、積もり積もった精神的快楽を今まさに射精によって昇華させようとしていた。

「んっ……ハアッ！　せ、静衣さまのそんな気持ちよさそぉな顔見てたらぁ……あ、あたしぃ……イクウゥッ！　射精してしまいますぅっ！　オチンポ汁いっぱい出るうぅっ!!」

「ふむぐっ!?　んっ！　んむうぅ――っ!!　むぐうぅっ！　ん――！　ん――っ!!　ごぼぼっ、ごぼぉっ！」

喉奥にぶちまけられた白濁液は、袴の布地の厚みなど感じさせないほどに、大量で濃厚で凄まじい勢いを持っていた。

数瞬の間に口腔を、咽頭を、喉頭を、そして食道の中途までを濃密な精液に満たされ、静衣は溺れるようにむせかえる。吐き出そうとした分は口腔を満たす肉棒に阻まれ、行き場を失って気管にまで侵入する。

「んぐむぅぅー！　んんぅっ！　ぐむぅぉぉ――っ！　ん……んぅ……」

（苦しいっ！　吐きたいのに吐けないよぉ……喉の奥がヌルヌルイガイガして気持ち悪い……息が出来なくて、私死んじゃう……？）

ゼリー状に集まった精液は、なかなか嚥下されることなく喉の奥へ留まり続ける。それ自体が一個の生物のように、圧倒的な存在感をもって静衣の喉粘膜を愛撫し続けているのだ。

「ア――ッ！　アンッ！　あはぁんっ！　凄い凄いよぉ！　オチンチンイクの止まらないよおっ！　静衣さまのお口最高ぉですぅっ！　あたしぃ、まだ出ますぅっ！　静衣さまの喉に注ぐの気持ちいいぃっ！」

半分白目を剥いた静衣の痴態に興奮したか、紗雪の射精は全く止もうとしない。次々と送り込まれる新たな精液塊は、順々に喉を覆い犯して、胃の中へ流れ込んでゆく。

「んっ……ぐむぅん……んぉ、んぉおぅ……」

（ああ……喉の奥じゅぼじゅぼされてる……こんな所まで犯されて……呼吸もほとんど出来ないのに……私、私ぃ……）

「うふふふ、ちゃんと飲んでくださいよぉ。栄養たっぷりなんですから」

濃密なゲルが、口内から胃までほぼ一体になって運動する。そこからもたらされるのは、当然予想される嘔吐感などではなく、体幹を揺さぶるような重くずっしりとした快感だった。度重なる肉体への改造処置は、上部消化管をも皮膚同様に敏感な性感帯と変えていたのだ。

静衣を狂わせる外的要因はそれだけではなかった。下部消化管、すなわち腸に居着いた蟲たちは管内壁への刺激を怠ることなく続け、膣や膀胱へ入り込んだ蟲たちも同様に自分たちの存在を誇示するかのように周囲の粘膜を舐め続ける。

それら全身の末梢神経から届けられる快感が、呼吸困難によって朦朧とする脳髄に突き刺さり、静衣は声にならない絶叫を発して絶頂感を受け止めた。

「はぁっ、はぁぁっ……あぁぁ、静衣さまの白目剥いた豚鼻の阿呆面ぁ……すっごく可愛くて、すっごくそそられちゃいますぅ……」

「ふむうぅぅ――！　むうぅぅ――！」

連続的に射精する物理的な快楽と、倒錯した支配感から来る精神的な快楽に、紗雪は恍惚として静衣の口を犯し続ける。それに対して抵抗も反応もすることができず、静衣はただ涙をボロボロこぼして全身を巡る快楽に浸り続けるのみだ。その中で、パツパツに張りつめた両の乳房がもたらす苦痛だけが、溶け出そうとする静衣の自我をかろうじて支えていた。

「あはっ、そうでした。お乳搾ってあげるって約束でしたよねぇ。静衣さま苦しそうですもん……いっぱいおっぱい搾ってあげなきゃ！」

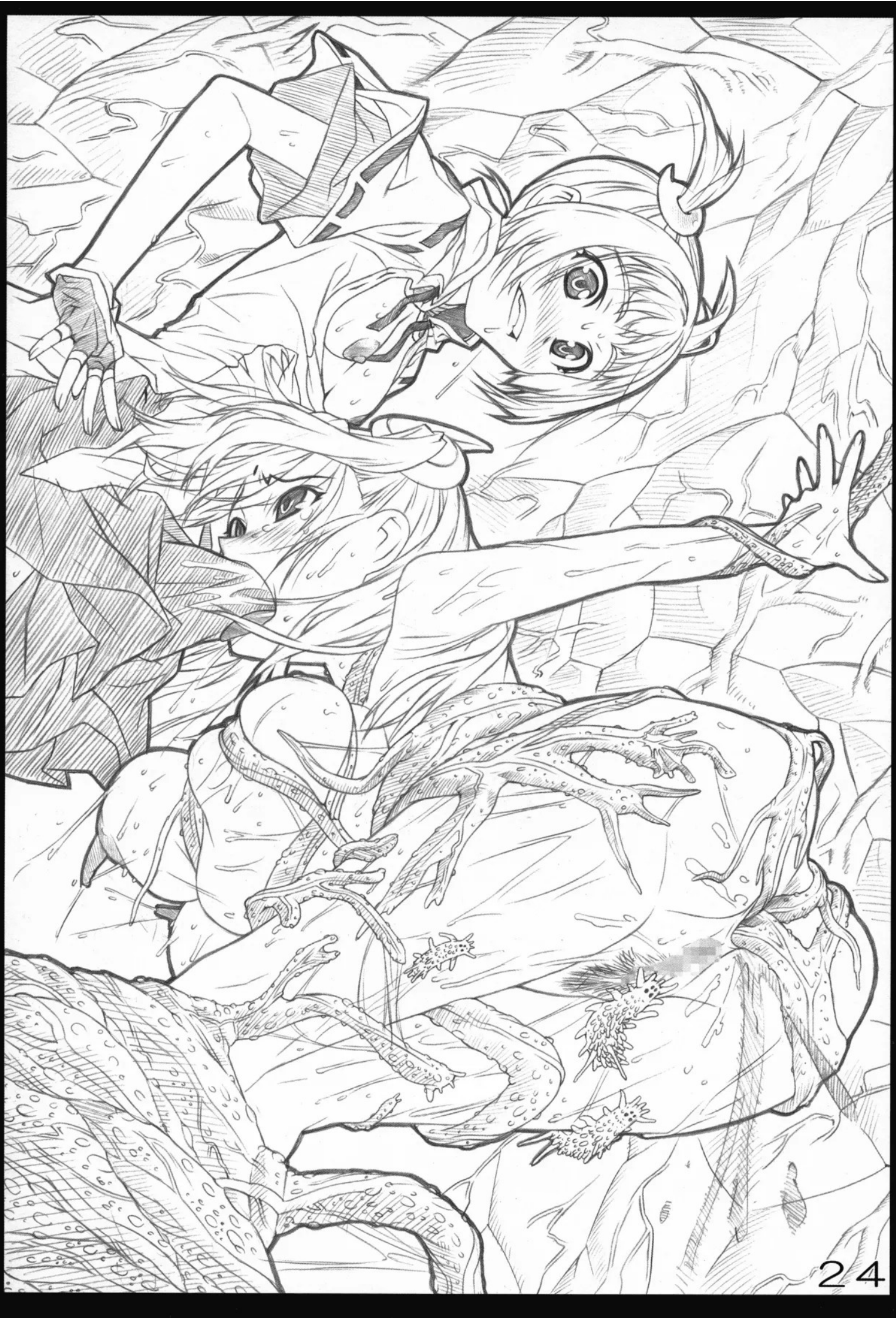
「んっ……ぷあぁ……」

紗雪は静衣の鼻を犯す二本の触手を引っ張り、自らの股間から無理矢理静衣の口を引きはがす。自分から腰を引くことが出来ないほどに、紗雪自身も快楽に打ちのめされていたのだ。

「う……うえぇぇ……」

「もう、吐くなんて品がないですよぉ」

自由にされた口から、流し込まれた精液の一部が戻ってくる。紗雪に注意されるまでもなく、嘔吐はす



蟲神楽

ぐに止んだ。喉を自在に犯す精液塊に対して、静衣自身の能動的な排出力があまりに弱いためだ。結果、静衣の喉は解放されることなく、この生臭いゲル状物質に犯され続ける。

「そうそう、そのまま大人しくしてて下さいね……うふふふ……」

「あ……う……」

もはや抵抗する体力も気力も失せた静衣は、言われるままじっと次の責め手を待ち受ける。それに応えるように床が小さくうねり、八本の触手を生み出す。触手達は、弾けんばかりに膨張した乳房へ左右四本ずつそろそろと群がり、押し包むように力強く圧搾した。

「あ……むふんぉぉおおおお――っ!!」

喉が弾けるような咆吼。

自我のバランスを保ってきた乳房の不快感が正反対の快感に変わり、静衣の神経系はより一層深く長い恍惚に狂わされる。

「ほむぅっ！　むごぅぉ――っ！　ぐむぅぅっ！　むぅぅ――っ！」

(イクッ！　お乳噴き出して私、溶け……るぅぅ……乳首がぁ、おっぱいがイクイクイクゥッ!!　ま、また入ってくるぅぅっ！)

溜まりに溜まっていた母乳が真っ直ぐ床へ噴射され、水しぶきを立てる。乳腺の隅々までを苛んでいた膨圧が緩み、代わりに生じた噴乳の勢いで乳管の内壁が擦られる。

各四本の触手は、膨張した乳房を這い下りて、白濁を噴き続ける乳首へ達する。そして触手の先端を四方から引っかけ、乳管洞をこじ開けた。狭い噴きだし口から母乳の噴き出すビュルビュルといった調子は、噴出口が広がったことによってドクドクといった調子に変わる。

その真下で、吐き出される母乳を浴びながら待ち受けていたのは、全体に繊毛がびっしり生えた細いブラシのような触手だ。静衣の精神にトドメを刺す使命を帯びた悪魔の触手は、無防備に口を開けた乳管洞の中へ、満を持してズルリと潜り込んだ。

「むぅぅ――っ!!　んぐむんぉ――っ！　ふおおおっ！　おおおおおっ!!」

両乳首の内部を柔らかいブラシで擦られる快感。敏感な乳腺の組織が、母乳と繊毛と媚薬に交互に晒され、静衣の心をくびり殺すような快感を生み出してゆく。

小麻呂の式神によって味わわされたものとほぼ同じ仕打ちだったが、式神のそれより数倍強い媚薬によって脳を冒された今の静衣にとっては、致命的に強烈な快感だ。

(あああぁ……気持ちいい、気持ちいいよぉ……もっと、私の頭溶かして、狂わせてぇ……)

もはや静衣の精神は八割方崩壊し、周囲の状況を認識することすらできなくなっていた。乳腺の奥の奥まで繊毛に犯され、腸と膀胱と膣奥を蟲になぶられ、広げられた鼻の穴から獣のように荒い鼻息を発してイキ続けるのみだ。

「うわあ……静衣さますごい……静衣さまのアソコ、こんなにびっしり蟲が埋まって……ホントに巣みたい……イッて痙攣するたんびに溢れてきます！」

いつの間にか背後に回った紗雪が、心底感心したように感想を漏らした。爛れた淫裂から断続的に蟲があふれ出し、また這い戻ってゆく。蟲たちがそうして一つ身じろぎするごとに、静衣は人知を超越した快楽の中で悶え、母乳と潮を噴いて絶頂感に翻弄され続けるのだ。

「あ……もう……静衣さまのこんなの見てたら……あたし、あたしもぉ……」

静衣の淫裂が放つ濃厚な牝の匂いを肺いっぱいに吸い込み、紗雪は興奮に頬を染める。陶然として筋肉の緩んだ顔を起こし、おぼつかない手で袴の帯を解く。

ベチョリという、布が落ちる音に似つかわしくない重い落下音。紗雪の袴の裏は、彼女が散々放出した精液でベットリと濡れていた。

鈴口の先から常時粘液を吐き出す肉槍は、自身の分泌液でヌラヌラと光り、硬く勃起した照準の先を蟲のうごめく肉壷へ向けていた。

「い……いきます……っくふうぅぅぁあああ――っ!!」

「んごおぉぉーっ!!　ほおぉっ!!　おおーっ!!」

熱く硬い肉棒が静衣の淫裂を押し割る。突然の闖入(ちんにゅう)者に驚いた蟲たちは、自らの『巣』を死守しようと暴れ回る。

一端を膣の内壁にビッシリとしがみつかせ、吸盤状の他端を侵入する肉塊に吸着させて、外へ外へと掻き出そうとうごめく蟲たち。その動きを長大な肉棒全体で感じ取り、刺激を楽しみながら、紗雪は力強く腰を突き出して肉槍の先を静衣の子宮底へ押しつけた。

「んひいいぃぃ――っ！　蟲があっ！　ちゅぶちゅぶした蟲がオチンチンに絡みついてくるぅっ！　アンッ！　しゅごいぃっ！　静衣さまのココぉ、いやらしすぎて気持ちよすぎてあたしおかしくなっちゃいますぅっ!!」

紗雪は激しく眼を剥いて、一心不乱に腰をぶつける。半笑いで涎を垂れ流すその表情は、まるで魔物にでも憑かれているかのようだ。

「ひーっ!!　ひいいぃーっ!!　イグッ！　ひぐうぅっ!!」

荒々しい肉塊に膣内の空間は圧迫され、行き場を失った蟲たちは子宮口を抜けて子宮の中へなだれ込んでゆく。頸管をガクガクと揺らされ、子宮内粘膜が刮ぐように蹂躙され、内臓をグチャグチャに掻き回されるような快感に、静衣は絶頂の中で絶叫と噴乳を繰り返す。

「あ、あたしもぉっ！　イッちゃう！　射精しますぅっ！　白いのドバドバオチンチンの先から出るぅっ!!　出る出るぅっ!!」

子宮口の環状筋肉によって亀頭を包むように締め付けられ、たまらず紗雪は子宮の中へ精を放った。尿道

口をチロチロと舐めていた蟲が勢いで吹き飛ばされ、子宮内膜へ叩きつけられる。

これまで何度も射精を繰り返しておきながら、その勢いと量は全く衰えることなく、ゲル状の濃密な白濁液が静衣の子宮を満たしてゆく。

流し込まれたアメーバ状の精液塊は、喉を犯すものと同様にそれ自体が一個のゼリー状生物となって、静衣の子宮を埋め尽くしてゆく。そして侵入していた蟲たちを内部に取り込み、一体となって子宮の中を蹂躙し始めた。

「あぁぁ――っ！　お腹あぁぁっ！　中があっ！　蟲がつぶつぶがぁ、ひっつく……は、剥がれるうぅっ!!　ひいーっ！　イクイクウゥッ！」

精液塊に取り込まれた蟲は、蛸の吸盤のように表面へ不規則に並び、火照った子宮内壁へ吸着を繰り返す。連続して吸われ、内粘膜を剥ぎ取られる刺激が周辺臓器にまで広がり、静衣を切れ目のない快楽へ導いていく。

「アハッ！　あはぁっ！　子種が止まらないですぅ！　静衣さまぁ、いっぱいいっぱい出しますからぁ、静衣さまの子袋に子種植え付けてあげますよお！　あ、はぁんっ……」

終わりのない射精感に脳髄を灼かれ、興奮のあまりに静衣の尻たぶを両手でばちばち叩き、紗雪は放精を続ける。流し込まれる精液は子宮に居着いたゲル塊に吸収され、その体積をどんどん膨らましてゆく。

本来子宮が占めていた空間をはるかに超えて、精液塊は自己の存在を強く主張するかのようにどんどん成長してゆく。静衣の下腹は見る間に膨れて波打ち、中で暴れるゲル塊の動きを映し出していた。

「ふあ……お、お腹裂けそぉ……そんあ、ところまで、広げ……ぇ……」

子宮の最深部に到達したゲル塊は、左右に位置する卵管の出口を押し開けて、その身体を滑り込ませる。膨圧で卵管そのものを広げながらジワジワ逆流して、ゲル塊の先端は左右の卵巣へと到達した。

「はっ、はひっ……っくぅぅーっ！　っくぅっ！　イクッ!!」

本来異物など侵入するはずのない管を広げられ、また新たな臓器を冒される。そんな倒錯した快楽に、静衣は身体を震わせ悦びの叫びを発する。

ゲル塊から染み出る精液は卵巣の隅々まで行き渡り、成熟したもの未成熟のもの問わず、作り置かれていた卵子全てに襲いかかる。受精することは確実だった。

異常な状況下で孕まされるという事実に被虐心を煽られ、静衣は再び深い絶頂へ連れ去られてゆく。膣内で紗雪の肉槍に圧迫されて藻掻く蟲も、尿道と膀胱を何度も行き来する蟲も、淫核の傷口を舐める蟲も、直腸を掃除して回る蟲も、両鼻を引っかけて広げる触手も、喉奥を激しく引っかき回すゲル塊も、両乳房の乳腺を犯す触手も、全てが静衣にとって憎らしくも愛おしい快楽の同伴者だった。

「ハアッ！　ハアァッ！　ハッ、ひゃあああぁ――っ!!」

乳首から触手が引き抜かれると、溜まっていた母乳が盛大に噴き出した。噴出は一旦治まったかのように見えたが、再び静衣がカクカクと身体を振って絶頂に達すると、間欠泉のように次々と母乳を噴き始めた。

犬のように舌を出して、焦点の定まらない視線を宙に泳がせ、獣じみた快楽の声を上げるその様は、完全に理性を失った狂人のものだ。だがその顔はまた、何か重荷から解放されたような、この上なく幸せそうな表情をしていた。

＊

それからどれほどの時が経ったのか、時間感覚を無くして久しい静衣たちにはもはや、判断する力は残されていなかった。

周囲の空間は相変わらず薄暗く、生臭い臭気を持った空気に覆われている。その発生源の一つであろう柔らかくうねり波打つ薄桃色の壁面に、静衣は突き立てた両手を埋め、尻を突き出す格好で踏ん張るように立っていた。

背中には半透明の体を持つ巨大なクラゲのような生物がへばりつき、十本近くに及ぶ触手を静衣の身体の各所へ這わせている。

内部から淫猥に改造された身体は、その外観までも変化させていた。異様に膨らんだ乳房にも尻の膨らみにも、そして妊娠して膨れあがった腹にさえも、従来とは明らかに異なる妖艶さが備わっていた。

「きゃうっ！　きゃううっ！　おっぱいぃ、舐め、舐めへぇぇ……！　あぁん、すごいぃ……」

いびつに歪んだ身体のラインに沿って触手が這う。背中を登り、首筋を這い、うなじを舐める。紅潮し濡れ光る皮膚から伝わる快感に、静衣は甘くとろけるような喘ぎ声を発した。

脇を撫で、腫れ上がった乳房を巻くように回り込んだ触手が、牝牛のそれのように肥大した乳首をジワジワと少しずつ搾る。

断続的に訪れる悦楽感を受け止めるように、静衣の淫裂はヒクヒクと痙攣して気を遣り続ける。その筋肉の緩みを突くように、中から這い出してくる者があった。

「くうぅぅん……ハアッ、出て……来るう来るぅっ！　産むぅっ！　赤ちゃん産まれるうぅっ!!」

痙攣する淫唇がぱっくりと開き、赤ん坊が顔を出す。出てきたのは、当然のことながら人間の赤子ではなかった。

破水して流れた羊水と一緒に、醜悪な肉塊が糸を引きながらこぼれ落ちるように産み落とされる。管魔を百分の一にそのまま縮めたようなその姿は、『子蟲』とでも形容するのが適当に思える。そしてその子蟲が落ちて行く先、静衣の足元には仰向けに寝ころび恍惚

と宙を見上げる紗雪の姿があった。
「あぁ……静衣さまとあたしの子供ぉ……可愛い、素敵ぃ……んあっ！」
顔面で子蟲を受け止め、紗雪は心地よさげに床へ身を預ける。すでにその身体には六匹もの子蟲が取り付いていた。
「おっぱいのぉ、先っぽ舐められて……イイッ、気持ちいいぃ……アンッ、噴くうっ！　お乳噴きながらまたイッちゃう！　イキながら産んじゃうぅっ!!」
一匹産んだだけでは飽きたらず、静衣は母乳を噴き出しながら続けて二匹三匹と子蟲を産み落とす。第一の母の胎内から第二の母の肌へ移動した子蟲たちは、その本能に従って紗雪の肉体を思い思いに蹂躙する。
はだけた装束の間に潜り込み、華奢な胸と腰を覆うように舐める。両手両足を拘束しながら愛撫するものに加え、がに股に開いた陰部にも子蟲が取り付き、蜜が溢れる淫裂をなぞるように愛撫していた。
何より強烈なのはそそり立つ肉槍への刺激だ。三匹で襲いかかる子蟲たちは、軟質の身体を覆い被せ、繊毛を有する触手を竿に、亀頭のカリ裏に、鈴口に、そして尿道の中にまで這い回らせる。入れ替わり立ち替わり攻撃する触手に敏感な器官を晒され、紗雪は快楽のあまりに絶叫した。
「おぁ……！　ほじ、ほじくられ……きゅうぅぅっ！　ひっ、吸い……っくあああ――っ!!　ハアッ、ハアアッ！」
子蟲の触手は尿道を逆行し、膀胱へ侵入するとともに輸精管にまでその先端を潜らせる。膨らまされた輸精管からは常時射精しているような快美感がもたらされ、暴れ回る触手の刺激をテコに、陰茎同様に形成されていた前立腺へと伝わる。
ムズムズと疼くような感覚とともにまたしても精液が作り出され、触手によってチュルチュルと吸い出されてゆく。凝り固まった体の組織が溶かされ吸い出されるようなその感覚もまた、抗いがたい強烈なものだった。
「……っ！」
淫裂を覆う子蟲が、内側からの圧力にぐっと押し上げられる。生じた隙間から漏れ出たのは茶色がかった黄金色の尿、そして細長い触手であった。男性器が有する尿道の奥深くから膀胱を経由して、女性器の尿道口にまで回り込んで来たのだ。
這い出した触手は下腹を伝い登り、再び鈴口へと戻っていく。二つの性器と膀胱を一本の触手が環状に繋ぎ、グルグルと巡り回る。気も狂わんほどの快感に、紗雪は白目を剥いて宙に爪を立てながら、失禁と射精を繰り返した。
半強制的に吸い出した精液をたっぷりと吸収し、ぷっくりと膨れた子蟲が紗雪の身体から離れる。子蟲は少しだけ床を這い、すぐ側に立つ静衣の脚に絡みついて這い上がってゆく。ふくらはぎを這い、太腿を登り、股間に達する。そして、まるで胎内回帰願望を満たすように、今なお快楽に震えて愛液を吐き続ける淫裂へ自らの体を潜り込ませた。
「ふぅ……はぁっ！　はふぅ、はふぅ……」
既に子宮奥深くまでびっしりとゲル塊に満たされているところに、さらに異物が入り込んでくる。その事実に被虐的な興奮を催した静衣は、壁に埋めた両手をぎゅっと握りしめて襲い来るであろう拡張感に備える。拒否するような素振りは全くなかった。
「くんっ……んあぁぁ――っ！　あ――っ!!」
子宮口をこじ開けて中に侵入した子蟲は、ここに至って溜め込んでいた紗雪の精液を吐き出す。広げられた卵管へ、その奥の卵巣へと精液が浸透してゆく感覚に、静衣は悦びの絶叫をほとばしらせた。
全身に絡みつく触手は、まさに穴という穴を犯し尽くしていた。ポロポロと断続的に蟲を吐く肛門へ、羊水と淫蜜がとめどなく溢れる淫裂へ、痛々しい穴の開いた淫核へ、緩みきった尿道口へ、そして母乳を噴き続ける乳腺へ、全ての穴に軟質で半透明の触手が潜り込み、静衣の身体を絶頂に導き続ける。
発生した濃密な淫気は、この閉鎖した空間を支える管魔に吸収されて熱量と化し、静衣たちをなぶる蟲や触手へ活力となって戻されてゆく。ここに、静衣たちの命を源にする半永久機関が完成していた。
「はあぁ――、あぁぁ……あ、くぅん……あぁぁ……」
喘ぎ声だけが漏れ、響いてゆく。何ら具体的な事象を認識することも、言葉にすることもなくなった静衣の脳は、生命の維持と快楽の生産以外の作業を放棄していた。幸福感に満ちた笑いを浮かべる口元からは、廃人と化した者の反射的な喘ぎ声が漏れるのみだった。

＊

二人の男が社の前に並び立っていた。
一人は色白で小太りの狩衣姿。もう一人は鎧に身を包んだ精悍（せいかん）なやせ形の男だ。一目見て、貴族と武士と分かるような出で立ちだった。
「では十枝殿、物の怪（もののけ）の件は全て片がついたと申されるか？」
「間違えられるな。今は六車であると申したはずじゃ」
「これは失礼。無事乗っ取りに成功したとのことでしたな」
見下すような武士の口調に、小麻呂は歯ぎしりしながら応える。
「跡を継いだ、と言って頂きたいものじゃ。実際、儂のように陰陽道に通じた者でなくてはこの神社は手に負えぬ。祓ったはずの物の怪が舞い戻って来るかもしれぬのじゃぞ？」
「はは、そう怒りなさるな。十枝……六車殿にはお約束通りこの神社の全てをお任せし、我らはいっさい口を出しませぬ。荘園の方も全て我らで管理してさしあげますゆえ」

蟲神楽

「今……何と申した？」
「神社は全て差し上げる、と」
「い、いや……その後じゃ！」
「荘園は全て当方で管理する、と申しました」
涼しい顔で武士は言ってのける。対照的に、小麻呂の白い顔は怒りによって見る間に赤く染まっていった。
「し、しかしだな……それでは儂らはどうやって暮らせば……」
「こんなに広い神社なのです。その辺りに畑でも作って、御自ら耕されてはいかがですか？」
挑発的な物言いに小麻呂は激高した。
「無礼な！　其方、ちょ、朝廷を敵に回すつもりか！　儂は都より参った正真正銘の貴族であるぞ！　帝に楯を突いて……」
「フンッ、偉そうに何が朝廷だ。[★23 てんじょうびと]殿上人でもない下っ端貴族がお偉方を動かせるとでも？　こっちはその気になれば、貴様ごとき簡単に消すことが出来るというのに、命を助けた上に神社までくれてやろうというのだ。武士の情けでな」
赤く染まっていた顔が徐々に元の白に、そして青白く変わってゆく。あまりに理不尽な脅迫に対して小麻呂は何も言い返すことが出来ず、屈辱に歪んだ顔を地面に向けて歯を食いしばっていた。
「では宮司殿、これからも我らと良きお付き合いのほどを……」
薄笑いを浮かべたまま武士は踵を返し、立ち去ってゆく。残された小麻呂は、静まりかえった社を呆然と眺め続けていた。

おしまい

ξ解説ξ ★24

★1　祓所……神社の敷地内にあり、祈祷などの儀式を行う場所。吹きさらしの場合もあるが、ここの場合はちゃんとした小屋になっている。

★2　蠕動……虫などがゆっくりとうごめくこと。ぐねぐね～。

★3　澱……液体の底に沈んだよどみ。沈殿物。

★4　紙垂……注連縄から垂れ下がっている紙製の白いひだひだのこと。

★5　手水舎……神社の入口にある、ひしゃくの置いてある例の水場。手を洗うのは大いに結構だが、飲んじゃダメらしい（衛生面の問題）。

★6　社務所……神職とか巫女さんが詰めてる建物。事務所みたいな感じ。住居兼の場合も多い。

★7　荘園……墾田永年私財法に基づく、主に貴族階級の私有地。私有地なので領主には税金がかかりません。そのアドバンテージをいいことに、小作人をこき使って私腹を肥やすのが一般的な使い方だったらしい。

★8　麻の葉の香……日本では、神社と朝廷以外にはあんまり麻に関するトリップ文化は無いらしい。酩酊状態を神聖な儀式と位置づけ、儀式を独占する天皇と神社の神聖性を守るための道具としていたためか、実は文化はあったけどGHQが焚書したのか、その辺りはよく分かりませぬ。

★9　襦袢……上着の下に着る肌着。今で言うシャツの替わりだが、かぶるタイプではなく前が開いていて留めるタイプ。裾が長い物（長襦袢）は下半身用の下着も兼ねる。

★10　神祇官……祭祀を司る国の機関。大宝律令の頃は一応国の最高機関だったけど、他に官庁が出来るに従って扱いがイマイチになっていったらしい。官位は一番偉い人でも従四位ぐらい。

★11　烏帽子……かぶったら思わず語尾が「おじゃる」になりそうな例の帽子。いかにも貴族といったアイテムだが、武士も普通にかぶる。北条時宗でもみんなかぶってたかと。

★12　狩衣……貴族が外出するときに着る、あのでかい袖の着物。狩りに行くときに着用とのことだが、絶対動きにくいと思う。

★13　宮司……各神社に一人居る、神社の支配人。大抵のところは今でも世襲制。実家が神職じゃない人は宮司にこき使われて大変らしい。

★14　陰陽師……NHKのドラマに出てきて「おん、かかか、さばびな……」とか言ってるあの人。晴明はお偉方と普通に会話してるけど、実は官位としては全然高くないらしい。従七位。

★15　禰宜……宮司の下で補佐をする神職。宮司よりは格下だけど、この下にまだ権禰宜とか出仕とかある。今は資格を取らないと禰宜にはなれないらしい。ちなみに巫女は神職じゃないので資格なしでもなれるそうな。だからバイトでも巫女は巫女。

★16　言霊……最初、呪文って書こうとして呪文は仏教用語だと気がついた。でも実際のところは神仏習合しまくりで呪文でも祝詞でも言霊でも何でもいいみたい。とりあえず語尾に「娑婆訶（そわか）」を付ければ何でも呪文になるっぽい。

★17　繊毛……生物の体表に生えている細い毛。ゾウリムシの顕微鏡観察でこの言葉を覚えた人も多いはず。あのゾワゾワッとした感じがショクシャーにはたまらない。

★18　隘道……細い道。官能小説用語では女性器のこと。女性器の外見ではなく奥の描写が伴うときに使う。

★19　婢……女の召使い。男の場合は「僕」というらしい。

★20　苦蓬……キク科の薬草。非常に臭いらしい。酒に漬けて成分を浸出させたのがアブサン酒。ゴッホはこれを飲み過ぎて頭がイカレたらしい。苦蓬じゃなくてアルコールのせいだろうという説もある。

★21　耳朶……みみたぶのこと

★22　環形動物……ミミズ、ゴカイなどの、身体が筒状の虫。消化管の入口（口）と出口（肛門）が前後に別れている。入口と出口が同じなら腔腸動物（クラゲなど）という分類になる。紙一重なようで大違い。

★23　殿上人……五位以上の官位を持つ貴族。前述のように陰陽師は七位なので殿上人ではない。六位以下の人は地下人（じげにん）という。

★24　解説……ちょっとお堅い本とか、専門性の高い本だと巻末についていることが多い。これ、一度やってみたかった。

ξ参考文献ξ

・神道がよくわかる本
阿部正路、PHP研究所
・阿倍晴明&陰陽道
夢枕獏、徳間書店
・堕淫乃巫女
深水直行、Chiii-Out
・淫縛乃巫女
深水直行、Chill-Out

あとがきとか

あれ、もうあとがきですか？　後ろ結構余ってますよ？

なんて言われそうなページですがどうもゴードンです。皆様お久しぶりです。初めましての方は初めまして。
表紙に惹かれて買って、中身が字だらけでがっかりした人はごめんなさい。まあ今回は絵も結構ありますが。
そう、この後のページには刑さんのイラストコーナーとゲストイラストのコーナーがあるんですよ。
作業途中で刑さんから送られてくる絵を片っ端から収録したらこんなになりました。いやあ豪華豪華。
キャラデザから挿絵からどっぷりとお願いしまして、もう香川には足を向けて寝られませんなこりゃ。
つーかエロいです。さすがです。なんかもう本編とかどうでも良くなるほどのエロさなんですが。
フタナリ率が高いのはいつも通り……あ、もしかして私の嗜好に気を遣ってる……？

さて、中身につきましてですが、とりあえず大事なお約束を。
このお話はフィクションであり、実在の人物・団体・事件・その他現実に存在する時間空間因果律全てと一切関係ありません。
この本は成人向けです。肉体的に１８歳に達していない人が間違ってこの本を手に入れてしまった場合、日本社会の悲しい現状に嘆きながら涙を飲んで、この本を完膚無きまで破断粉砕の上廃棄してください。

今回は歴史物に挑戦であります。まあ舞台はほとんど閉鎖空間なので、あんまり歴史物である意義は感じられないかもしれませんが。
神道が出てきますけど、別にゴードンは右翼というわけではありません。国粋主義者と間違われて革命家にゲバ棒で撲殺されては大変です。
それにしても、荘園いいなあ。欲しいなあ。固定資産税も相続税もかからないなんて、ウチの大家さんも大喜びですよ。ああ、平安時代のヒキコモリ荘園領主になりたい。
このお話は、その荘園が理不尽な暴力によって滅んでいく様を描こうという設定なわけですが、できあがったモノは巫女とフタナリと触手と蟲だらけのただのエロ小説でした。いつも通りやんけ。
まあそれはそれで、きっと楽しんでくれる人が居ると信じて書き上げた次第であります。

今後どのような形で皆様の前に現れることができるかまだ未定ですが、
どうかゴードンの行方を生暖かく見守って頂けると幸いです。

謝辞

この本の発行に際しまして、色々な方にご協力を頂きました。ここに感謝の意を表したいと思います。
極力ヒッキーなどとほざいているこんなヤツを見捨てずにおつきあいいただき、ホントにありがとうございます。

刑さん、こんなにたくさんエロいイラストをありがとうございます。お仕事がんばってください。
また一緒に何かやりましょう。

零音さん、すんごいゲストイラストありがとうございます。気合い入りすぎです。
サークル「470in」での活動にも期待してます。

ＮＡＯＨＩＲＯさん、お忙しい中素敵なゲストイラストありがとうございます。
またメイド居酒屋行きましょう。今度はメイド喫茶をはしごしましょう、はしご。

田沢尚さん、校正してくれてありがとうございます。
日々の忙しさに負けずに創作に戻ってきてくれると嬉しいです。

深水直行さん、不安な社会にくじけそうな時に励ましてくれてありがとうございます。
商業も同人も期待してます。

こぎとさん、いつも愚痴とか聞いてくれてありがとうございます。
あと少し、勉強頑張って乗り切ってください。

そしてこの本を買ってくれたみなさま。本当にありがとうございます。今後ともよろ触手。

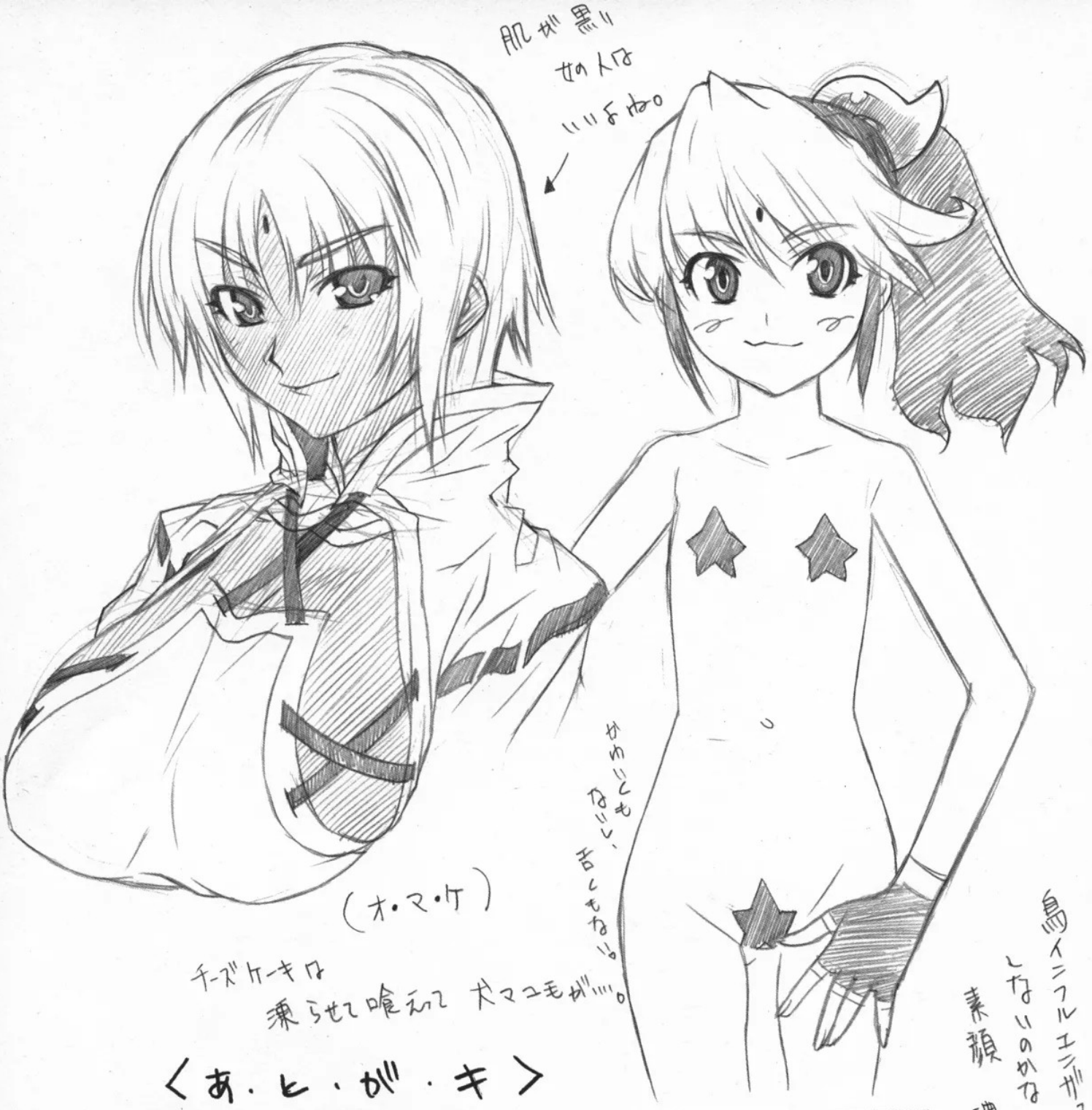
六車静衣。
髪型は
「ロングモア」の
ヒロインと同じです。
むらさきが主。
ここで結ぶ。
(ソックス茶系。)
NG
NG
(うしろ髪。)

紗雪。
赤。
スリットなし。
ズボンの前にリボン。
ズボン。
手ぶくろ。
服みたいな
刺付。
袖は黒。
背中も丸見え。

ミシキ
ミシキ
ミシキ
だれにこんわっ
ワイのチ○ポ
ハメハメしとんねや。
おっ
おっ
おおっ

あっ
ふぁぁん
オチッ
ヒクヒク
ズブッ
ズブ
ナップ
オチチッ
キュキュ♡
よ
なぁっ
はぁ
うん
ギチ
ギチ
こんなのいかがですか
のこっていませんが、
どうぞお楽しみ下さい♡

はぁーっ
はぁーっ
ハッ
ハッ
ハッ
ヒクッ
お姉ちゃん
見てぇ
見てよー
あ、ちがうのー
プシュッ
プシュッ
プシュッ



(オ・マ・ケ)

チーズケーキは
凍らせて喰えって 犬マユもが!!。

〈あ・と・が・き〉

鳥インフルエンザって、蚊で感染
しないのかなあ…っていうか 青騎士、
素顔 濃すぎ♪~

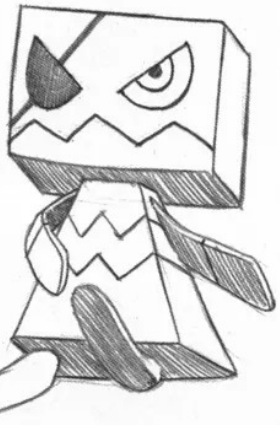
「これからは、もっと カワイイ・キャラを 描けるように しないとなあ。」
とつくづく思う 今日 このごろ。

そんな時に受けた 作品が 今回の物
です。

まだまだ だけど(能が:) また ゴーバン
さんとな 作品を 作っていたいなと。

(P.S.)
早く「ラ・ピュセル」の同人誌、作りたいです。

でも その前に すごく くだらない
本を 売りそうです。



Kei

SAKULA

I&I
NAOHIRO

こんにちわ〜！サークル「I&I」のNAOHIROです！
今回はゲストに呼んでいただいてありがとうございま〜すw
ゴードンさんと知り合ったのは、ちょうど1年前のレヴォの会場だったと思いますw
そのレヴォの作品でゲストをやることになるとはw
また一緒に飲みに行きましょうぜぃ！

<2004.4>

奥付

発行サークル
Ｄｏｐａｍｉｎｅ

発行者
ゴードン

初版
２００４年４月２９日

印刷
株式会社ブロス様

連絡先
〒１１２－００１１
東京都文京区千石４－３５－３－２０９　長谷井方

Ｅ－ｍａｉｌ
godon@pink.sakura.ne.jp

ＵＲＬ
http://pink.sakura.ne.jp/~godon/

この本の一部ないし全部を無断で転載・複製することを禁止します。
この本の発行に伴う著作権等の諸権利は発行者にあります。
ただし、イラストに関する版権は各制作者に帰属します。
この本を用いたことによる不具合について、発行者は一切の責を負いません。所有者各自の責任において閲覧・ご使用ください。
成人向けのため、１８歳未満の方の閲覧・購入を禁止します。